都留文科大學報

Vol.157
March. 2025

70th TSURU University

色とりどりのミライへ。

特集　都留文科大学創立70周年記念事業

さよなら「文大」退職教員からのことば
おくることば／旅立つことば
卒業論文・修士論文 一覧
講演会だより／文大だより／ぶんだい堂

都留文科大学は2025年、
創立70周年を迎えました。

70 周年記念事業にあたり、写真をご提供いただいた皆様に感謝申し上げます。

TSURU University

都留文科大学創立70周年記念事業

都留文科大学は、昭和２８年４月に創設された山梨県立臨時教員養成所を起源に、昭和３０年４月には、都留市立短期大学を設置し、さらに昭和３５年４月には、４年制の都留文科大学へと移行、平成２１年４月に法人化され、以来、多くの変遷を経て、令和7年度に短期大学設置から数えて、７０周年の節目の年を迎えます。

これまで、本学では伝統である教員養成や強みである地域との連携を続ける中で、多様な人材を輩出してまいりました。急速な少子化が進む中で、本学が選ばれる大学、魅力あふれる大学となるため、この創立７０周年を機に、改めて教育の質の維持向上に全学的に取り組み、本学の教育研究活動を周知するとともに、未来に向けた確固たる地位を維持していくため、各種事業を計画しております。併せて、学生が学ぶ環境を整備するため、今回の 70 周年記念事業を通して、多くの同窓生が学び励んだ１号館の大規模改修工事を実施いたします。

このような新たな大学像を実現するために、教職員だけではなく、在校生や同窓生、本学を支えてくださる地域の方々など、多くの皆様にこの事業に参加していただきたいと思います。

外観イメージ

内観イメージ

ＬＰサイトを公開しました

大学創立70周年記念特設サイトがオープンしました！

最新のお知らせやイベントはこちらからご確認ください。

ホームカミングデーについて

本学教員による特別講演や、1号館改修工事直前に1号館ラストキャンパスツアーを行います。
久しぶりに母校を訪れてみませんか？
ぜひこの機会に母校を訪れ、思い出の1号館（昭和41年完成）をご覧ください。ご参加をお待ちしております！

開催日	令和7年4月20日（日）
場所	都留文科大学
対象者	本学同窓生（卒業生）、在学生、教職員、地域の方々など
実施内容	学長挨拶、特別講演、キャンパスツアー（1号館）、親睦会など 【 9：30】 開会、学長挨拶、大学紹介動画視聴 【10：10】 特別講演 講演者：邊見 信 題 目：「メディア」という妙薬と劇薬!? ～子どもとメディアの歴史から～ 【11：15】 キャンパスツアー 【12：15】 親睦会 【14：00】 終了
参加費	無料

お申込みはこちら

記念式典について

70周年記念式典・講演会及び祝賀会を開催します。
全国大会で多くの入賞歴のある合唱団による学生歌「花のかげ」や管弦楽団の演奏、ストリートダンスサークルによるダンスなど、在学生によるパフォーマンスを見て、本学で学んだあの頃を思い出しませんか？
記念講演会では、日本文学研究者ロバート キャンベル氏による講演を予定しておりますので、多くの同窓生の皆様のご参加をお待ちしております。
記念講演会終了後は、祝賀会を予定しておりますので、本学教職員や同窓生同士などで語り合い、久し振りの都留の夜を楽しみましょう！

ロバート キャンベル氏

開催日	令和7年10月11日（土）
場所	都の杜うぐいすホール
対象者	本学学生、同窓生、市民などどなたでもご参加いただけます。
参加費	無料（祝賀会参加者は参加料を徴収する予定です。）

70 文字のコメントを募集しています！

大学創立70周年を記念して、在学生、卒業生、教職員、地域の皆様からのコメントを募集しています。

創立70周年にちなみ、コメントの文字数は70文字までです。

都留文科大学への期待や想い、都留文科大学での思い出や、近況などについてぜひコメントをお寄せください！

お寄せいただいたコメントは70周年コメントページに随時掲載させていただきます。

投稿は
こちらから

PR動画について

現在、制作中の動画はまもなく公開予定です。皆様にお楽しみいただける内容となるよう仕上げの作業を進めております。

動画は、ブランディングムービー（１分程度）と紹介ムービー（10 分程度）の２つに構成されています。大学の「現在」を切り取った内容となっていますが、卒業生の方にも親しみやすい構成となっております。

動画の制作にあたり、募集を行った「都留文科大学での思い出の写真」におきましては、多くの方々から素敵な写真をご提供いただきました。心より感謝申し上げます。どの写真も魅力的で、映像に彩りを添えてくれています。

４月に 70 周年特設サイトで公開予定です！ぜひご覧ください。

記念寄附金の募集について

これまでの歴史の中で、本学の教育振興に寄せる先輩諸氏・同窓生の母校愛、地域の方々の地元愛に支えられながら、輝かしい歴史と伝統を築き上げ、今日まで発展してまいりました。本学のさらなる飛躍と発展、次代を担う学生の育成のため、皆様方のご支援・ご協力をお願いいたします。

おすすめ！ 方法01 ネット申込・決済 ※F-REGI

ネット申込・決済　※ F-REGI（エフレジ）

右側の QR コードよりお申し込みください。

【ご利用可能の決済方法】

・クレジットカード（上限金額なし）　・コンビニエンスストア（5万円未満）

・Pay-easy（上限金額なし）

※決済手数料は無料です。また、「寄附申込書」は不要です。

寄附金特設サイトからアクセス

方法02 郵便振替

郵便振替

郵便局(ゆうちょ銀行)窓口･ATM による払込みは、「払込取扱票」が必要となります。ご希望の方は、右側の QR コードからご請求いただくか、下記までお問い合わせください。

※振込手数料は無料です。また、「寄附申込書」は不要です。

「払込取扱票」の請求はこちらから

方法03 銀行振込

銀行振込

銀行からのお振込みは、「寄附申込フォーム」に必要事項を記入したあと、下記の口座にお振込みをお願いします。「寄附申込フォーム」は右側の QR コードからご記入いただけます。「寄附申込フォーム」への回答が難しい場合には、下記までお問い合わせください。

金融機関・支店名	種別	口座番号	口座名義
山梨中央銀行都留支店	普通	1009150	公立大学法人都留文科大学
ゆうちょ銀行 029 支店	当座	0118109	都留文科大学　寄附金口

※振込手数料はご負担ください。

「寄附申込フォーム」はこちらから

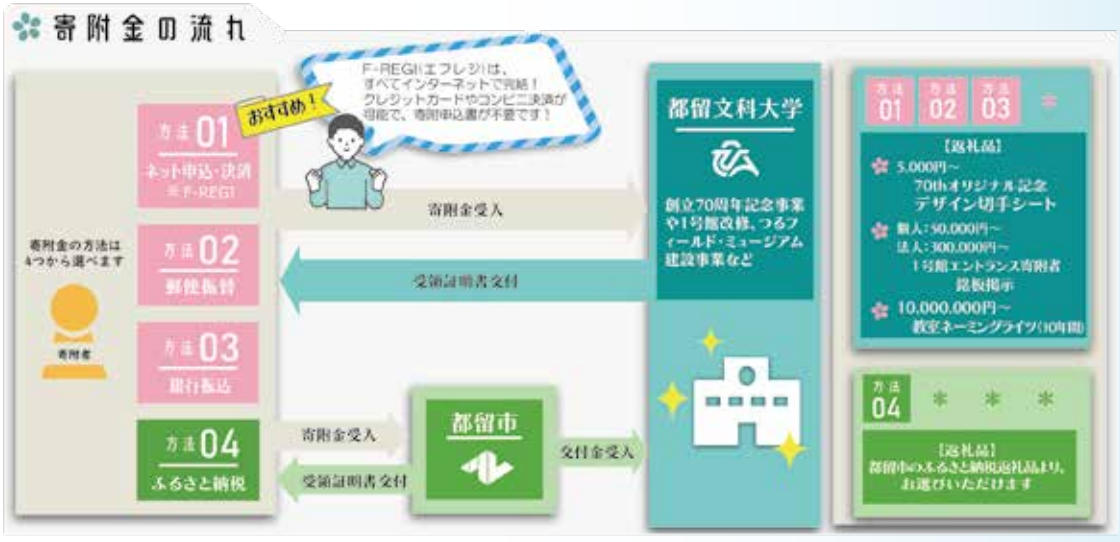
方法04 ふるさと納税

都留市ふるさと納税特設サイト「TSURUSELECT」によるご寄附

右側の QR コードからお申し込みください。

※都留市にお住まいの方は制度上、都留市からのふるさと納税返礼品のお受け取りができません。上記の方法 01 ～ 03 をお選びください。

都留市ふるさと納税特設サイトはこちらから



本寄附金に関するお問い合わせ先

都留文科大学創立70周年記念事業期成会事務局　公立大学法人都留文科大学　総務課

〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1 電話 0554-43-4341（代表）

「古典学」としての「国語国文学」を

国文学科教授　加藤　浩司

都留文には11年間お世話になりました。無事勤めを終えられたのも同僚の先生･職員様方、学生・院生さん方のお蔭と心より感謝いたします。

３年前に健康上の理由で定年より少し早く退職することに決め、指折り数えてその日を待ちました。今後は少しでも長生きできるよう、仕事も研究もやめて、田舎で気楽に晴耕雨碁の日々を送る予定です。

国文学科は旧国公立ではもはや珍しくなりました。特に「国語学～」という名前で科目を開設しているところは少ないと思います。全国的な「日本語学会」の名称をはじめ､現在では「日本語学～」と称する大学がほとんどだからです。

自身は名古屋大学文学部・院で学び、最終学歴では「文学研究科国文学専攻国語学専門」ということになっています｡学部では文学系で「うつほ物語」を卒論に選びました。大学院では語学系に転向して助動詞キ・ケリの差異や語彙論の研究をしました。

演習では変体仮名を読み、日国大を引き、卒論や修論では岩波古典大系などの注釈書を読みながら必要な用例をノートやカードに書きまくるのが常でした。修論までは原稿用紙に万年筆で執筆しました。その後ワープロやコンピューターが普及し、研究の道具は変わっていきましたが、注釈書や文献を頭から読み、作品を理解しながら一つ一つ用例を採る、という方法は基本的に変わりませんでした。今流行りのコーパスから検索ソフトで用例を採る方法は、私にはどうもなじめませんでした。

就職して身分が安定してからは、国語学的に価値のある文献資料の発掘にも手を出すようにしました。最近全て始末しましたが、トタン製の箱が約20、私の研究室の書架の上に置いてありました。中身はほぼ江戸の版本で、漢籍・仏書・心学書・手習い書など多様な顔ぶれです。その中には研究対象となった「仮名貞観政要」の版本や「女大学絵抄」、「両点本法華経」なども含まれていました。

ある文献資料が何らかの価値を有するかどうかは、少なくともそれを読んでみないとわかりません。変体仮名や行草で書かれた古文や漢文を読んで内容が理解できなければ、その資料の研究上の価値がわかるはずがないのです。そういう意味では歴史の先生方の方が生の文献資料を読むプロなので、私のようなレベルでは笑われてしまうでしょう。

本学国文学科は国語国文学について総合的に学べる学科です。古文や漢文を読む力を身に付けられるカリキュラムを用意している学科です。変体仮名の読み方も指導しますし、演習では古文献も取り扱います。希望さえすれば文献資料を扱うための最低限の知識やスキルも学べます。

願わくは本学国文学科がそうした「古典学」の課程を将来も維持していってくださることを、そして日本の古典を読んで正しく理解できる方を一人でも多く世に残してくださることを。後進の皆様にはこの願いをお心のどこかに留めていただければ、と存じます。

両点本法華経冒頭

教育と研究の思い出

比較文化学科教授　**伊香　俊哉**

2002年4月に着任して、23年間どうにか勤め上げることになりそうです。

教員採用の応募書類を出したのは前2001年の夏だと思いますが、その年の9月11日にアメリカでいわゆる同時多発テロ事件が発生しました。深夜、テレビ中継に釘づけになっていたことを今でも鮮明に記憶しています。事件後、アメリカを筆頭とする欧米諸国と日本、さらにはロシア、中国などは対テロ戦争へと向かっていきました。現代史を転換する大きな契機となりました。一方この頃、日本では1990年代に高まった戦後補償運動・加害責任論への反動が90年代後半に起こり、歴史修正主義が高まっていた時期でもありました。

日本近現代史を専門とし、とりわけ1930年代以降の戦時期の研究をしていた私でしたが、一方で新たな戦争の世紀に突入し、一方で過去の戦争を忘却するかの状況が進行しつつあったことが、着任後の教育と研究を規定していったとも、今振り返ると、思われます。

その後カリ改訂で2004年度から戦争・平和論（通年）が開設され、私が担当するメインの講義科目となりました。2013年度からは、セメスター化により戦争・平和論と現代世界とジェノサイドという2科目となりました。これらの授業との関係でフィールド・ワーク（現スタディ・ツアー）で戦争遺跡・博物館などを学生と一緒に見学する旅を重ねられたのは、楽しい記憶です。また2010年代末までは毎年ゼミ志望者の中に、ホロコーストや「慰安婦」問題、戦後補償問題といったテーマを選択する学生が数名はいる感じだったのが、20年代に入るとそのようなゼミ志望者が少なくなった感があります。やや時代が変わったかなと感じています。

2024年度に新カリに移行する過程で、比較文化学科では学科の科目をいくつかの科目群として捉えられるようにしようとのことで、議論が積み重ねられ、「表象・文化交流」「コロニアリズムと人文学」「開発・人の移動」とならんで「平和・国際」というカテゴリーが設けられたのは、私としては嬉しいことでした。今後とも戦争・平和研究を学科の柱として発展させていっていただきたいと思います。

私にとって本学は初の専任校だったので、それまでの長き非常勤時代とは研究環境上非常に大きな差がありました。なんと言っても顕著だったのは2度にわたる在外研究の機会を得られたことです。最初は2012年度でしたが、北京大学にお世話になりました。2度目は2022年度後期に北京の首都師範大学にお世話になりました。1度目の時は、尖閣問題、2度目の時はコロナ禍に見舞われるというありさまでしたが、これらの滞在で得られた史料や人的交流は、研究の進展の上で、大変貴重なものとなっています。今後も教員の研究活動を大事にする大学であっていただきたいと願います。

本学の今後の発展を心からお祈りいたします。

ビルケナウの象徴ともいえる鉄道
引込み線と監視塔（2005年）

忘れがたい入試シーズンの雪景色

思いを伝える

学校教育学科教授　加藤　優

教職にかかわるようになって 38 年。大学院を修了してから附属小学校で 12 年、医療系の大学で 18 年、そして都留文科大学で 8 年。幼児から 80 歳を過ぎた高齢者まで対象は違いますが、ずっと教育に関わってきました。もともと教員になるつもりはなかったので、よくも続いたものだと思います。とくに大学教員には研究テーマがありそれを追究し、授業として講義していくものだと院生時代に感じていました。

退職を前に自分の研究テーマは何だったのかと問い直したとき、何を残せたのか分からなくなっています。それでもこれまでかかわった子どもたちや学生は各々活躍していて、政治家こそいませんが、小児科医や空港職員、老舗菓子屋、建築士、社長もいたりして、多種多様な場からときおり近況を知らせてくれています。もちろん教師になって全国で活躍している卒業生もいます。みな、それぞれに楽しく明るく暮らしているようです。

以前、先生をめざしている学生に、「自分が弁護士や医者になることはできないけれど、それになる子どもたちを育てることができる」と伝えたことを思いだします。教員になってよかったと感じることはたくさんありますが、卒業生から結婚式に呼ばれるときはいつも心が躍ります。なかでも小学校で教えた子どもの場合は、わが子の式に参加するくらいの喜びを感じます。壇上の新郎新婦を見ながら話すときは、自分の思いが伝わっていたことを実感する瞬間です。

研究とは自分の知りたいことを自分のために深めていくことだと思います。ある意味「遊び」に近い自己目的的活動です。それが論文になり業績となって公表され評価されます。それは自分が楽しく夢中になれればいい、他人がどう感じようと思いをぶつければいい。そんなものだと感じます。教育はどうかというと、はじめから目標があって、その時代の望ましいとされる価値と自分の思いがどう伝わったかという成果が問われる外在的で手段的な活動です。そう考えると研究と教育は対極にあるのかもしれないと思っています。

しかし研究にせよ教育にせよ、伝える行為は同じかもしれません。自分の思いを伝える。どんな思いも伝わらなければ意味がありません。これまで自分の願いとは裏腹に、うまく伝えられなかったことがたくさんありました。若いころは「なんで分からないのだろう」「なんど言ったら伝わるのだろう」とうまく伝わらなかったことに腹立たしさを感じたものでした。でも、いつしか「思いを伝える」ためにはそのための技術が必要であり、自分が「伝えたい」気持ちより、いかにして相手が「聞きたい」と思わせるかが重要ではないかと思うようになりました。

これまで教室や講演会場で、さまざまな聞き手とその環境で思いを伝えてきました。何が伝わったのか、それが自分の伝えたかったことなのか、知る由もありません。それでも 38 年間、「思いを伝える」ことに力を注いでいたことに誇りを持つとともに、その場を与えられてきたことにあらためて感謝します。

令和 6 年度卒論発表会・最終講義後、ゼミ生と

不思議で暖かな時を過ごして

学校教育学科教授　筒井　潤子

不思議な大学、不思議な地域、とても不思議で暖かな 20 年でした。

研究室　静かな別荘地の隠れ家

20 年前、１号館２階の片隅に『臨床教育学系（当時）』の新設に伴って、大きな教室を改装して３つの研究室が作られました。廊下の扉を開けて靴を脱ぎ、またその奥の扉を開けると、「広い！」と誰もが思わず口にする、ほんとうに広く静かで贅沢な空間です。この環境に守られて、さまざまなことを考えることができたように思います。その「隠れ家」が 20 年の時を経て、１号館改修に伴いここで取り壊されることに、なんだか感慨深いものがあります。

卒論　自分の生き方のキーワード探し

この部屋で、３年生後期年明けから卒論準備が始まります。最初の課題は、キーワード探し。自分は何を考えたいんだろう。何にこだわって生きているんだろう。そう問いかけた時浮かんでくる、自分のキーワードを探します。それを卒論のテーマと重ねながら１年間大切に温めていくと、その言葉のもっと奥にあったものに繋がったり、漠然としていた言葉の焦点が絞られて腑に落ちるものになっていったりします。１年をかけて形になった卒論は、その「見かけ」以上に、自分が大切にするものが何なのかを一生懸命探し求めた大切な作品です。

「卒論は、心の中でこれからも書き続けられる。何十年もたって、本当のキーワードにたどり着くかもしれない。卒論はその入り口だから、楽しみにしていてね」と、卒論発表会の最後に伝えています。

地域　つながりの網目のなかに

この部屋の窓際に作ったささやかな相談室もどきの一角で、先生方、子どもや親御さん、地域の支援者のみなさんとたくさんお話を積み重ねてきました。学校に伺ったときは、「SAT の先生の先生だよ」と紹介していただき、子どもたちや先生方と関わりを持たせていただきました。

一人の子どもさんを巡って、さまざまな方々と知恵をだし悩み合いました。そんな時、まるでこの「都留」という町の中に、目に見えない細かなつながりの網目が張り巡らされているかのように感じられました。時々「私は、部外者なのかな」と思うほどそのつながりは強く重層的で、でもふと気づくとみなさんの輪の中で安心している自分がいる、そんな体験をいくつもさせていただきました。

先日、10 年を超えるお付き合いのお母さんと、最後の面談でした。紹介してくださった当時の校長先生、悩みあった福祉の方々、歴代担任のお名前を一緒に懐かしみながら、お母さんも子どもたちも、これからもしっかり「都留」に支えられていくんだなあと、しみじみした思いでお別れしました。

貴重な体験をさせていただいたことに感謝しながら、進化する都留の中で「良い伝統」が引き継がれていくことを願っています。

12 月･卒論完成に向けて、エネルギーチャージ！

ありがとう、文大！

地域社会学科教授　西尾　理

忘れもしない、都留文科大学から面接の電話をいただいたのは運転中であった。引っ越しのため、不要になったＣＤを中古屋に運んでいる最中だった。両親が亡くなり、都立高校の教員としても先行きが見えず、東京を脱出したいとも思っていた。こうした公私とも行き詰っていた時であった。大学の公募は出していたが通過することもなく55歳を過ぎ、もう諦めていたが惰性で出していた。それが思いもかけず面接に呼ばれ、一筋の光が見えたような気がした。その３年ぐらい前であったか、休みの日に、河口湖に電車で行ってみようと思い立ち、住んでいた京王線の仙川から高尾、高尾から大月、大月から河口湖まで遠征したことがあった。富士急の途中駅に都留文科大学前があった。自分が受験生だった頃から知っていた大学であり、ここに都留文科大学があったのかというちょっとした驚きがあった。車窓から駅からの遠くの風景に眼を凝らしてみた記憶がある。思いがけず、その大学に引き取ってもらった。ありがたかった。今でも時折思い出すのは、面接で呼ばれて、守衛の小屋を通る時。面接の待ちで、事務室に上がる階段を昇る時である。その時、感謝の気持ちを思い出したりもする。拙い論文や著書をしっかり読んでもらって評価してくれたこと、何の縁もない一介の都立高校教員を評価してくれたことに。

赴任後、西尾を引き取って良かったと思ってもらいたいという気持ちで一杯であった。まずは、所属した地域社会学科は教育学科ではないので、教職に関しては、学科の“灯台”になろうと考えていた。地域社会学科の教職を一手に引き受けようと思った。

教育では、指導法において、学生に利する内容や方法をよく考えて実践していこうと思った。全国から集まった学生たちは素直で、今までの教員生活の中で一番ストレスレスな学生たちであった。学生に頼まれて、教員採用試験の面接補講を行ってきた。それは今も継続中である。こうした授業や補講で関わった学生の何人かとは今でも繋がっている。

ゼミや大学院で学生を指導する機会もいただいた。10年前には考えられないことであった。この学生たちもやりがいがある学生たちであった。今でも繋がっている卒業生がいる。

研究では、平和教育、社会科教育、学校教育論と３つの分野で行ってきた。都留文科大学に赴任する前から３つの分野のテーマが決まっていて、それをひとつひとつ論文や本にしていくことを目標にしていた。赴任後、平和教育２つ、社会科教育２つ、学校教育論６つのテーマが残っていたが、そのうち、平和教育２つ、社会科教育の２つ、学校教育論の５つはクリアして論文や著書にまとめることができた。

このような経験をもたせてもらった都留文科大学には感謝しかない。それも同僚、事務の方々、何よりも都留という小さな市が悪戦苦闘の中で都留文科大学を創設した先人たちのおかげです。

ありがとう、文大！

研究室から見える風景

おくることば

旅立つことば

これからの長い時間で

国文学科教授
古川　裕佳

卒業おめでとうございます。皆さんはこの春、都留から／文大から／ムーミン谷から、離れ／追い出され／脱出して行きます。ここでの数年は、学問に、遊びに（推し活？）、部・サークル活動（ガクチカ？）に、力を注いだ濃い時間だったことでしょう。しかしこの自由な時間に比べれば、その後の方がずっと長い。学生時代とはまた別の、意義深い時間を過ごして欲しいと思います。

「仕事をしていて達成感を感じるのはいつか」というインタビューを、自分の子どもからされたことがあります。キャリア意識の課題だったようです。少し考えて出した答えは、「関わった学生が卒業後に社会の中で元気にやっているのを知った時」というものでした。ゼミ生が真剣に取り組んだ卒論を受け取った時というのも考えましたが、そこは学生にとっても教員にとっても最終目的地ではない。卒論のその後こそが大事だと思うからです。

出張仕事や飲み会などでゼミの卒業生と再会すると「もう一度ゼミの議論の場に参加したい」とよく言われます。もちろん懐かしさゆえのお世辞かもしれませんが、もしかしたら実社会は、それなりに厳しい教員だと自負している私のゼミよりも、ずっと厳しく辛いバトルフィールドなのかもしれません。でもそう言って笑う卒業生たちは不満も愚痴もありながら生き延びている、自信に満ちた顔をしています。

卒業生の皆さん、これからの長い時間の中で、ぜひ元気な姿を見せてください（〇〇はワシが育てたなんて決して言いません：笑）。そしてもし、元気のない時には、ここに元気を充電しに来て下さい。そういう逃げ場としてもあり続けたいと思っています。

問いとともに歩む

英文学科講師
堤　博一

卒業おめでとうございます。私が都留文科大学に着任してからの２年間、皆さんが学びに真摯に向き合い、考えを深め、成長していく姿を見守ることができたことを心から嬉しく思います。今年は、初めて卒業論文を指導する機会をいただき、皆さんとの対話を通じて、私自身も多くの刺激を受けました。

大学での学びは、単なる知識の集積ではなく、それによって視野を広げ、新しい問いを立て、それについて考え続ける力を育むものです。この２年間、皆さんは「言葉」という軸を通じて、まさにこのプロセスを繰り返し、それぞれの形で学びを深め、自分自身を磨いてきました。言語学では言葉を可能にする構造や仕組みを探り、文学では言葉が生む物語を通じて人間や文化を見つめ直し、英語教育では言葉を次世代へ伝える術を模索してきました。これらの経験が、きっと皆さんの未来を力強く支える財産になるはずです。

これからの人生には、挑戦や予想外の課題が待っているかもしれません。しかし、それらは皆さんの学びを生かす機会でもあります。もし迷うことがあれば、大学で過ごした日々を思い出してください。ここで得た知識や経験は、未来を切り開く助けとなります。そして、母校はいつでも皆さんを迎える場所であり続けます。新しい問いに挑む中で振り返りたくなったときには、どうぞ訪れてみてください。

皆さん一人ひとりの未来が希望に満ちたものであることを心から願い、これを「送ることば」といたします。

大学生活の宝物

学校教育学科教授
中川　佳子

ご卒業おめでとうございます。４年間勉強に部活によく頑張りました。そして、大学生活を通じてたくさんの仲間ができましたね。大学での友は社会に出て困難な場面に出くわした時に、助言をくれたり、慰めたりしてくれる大切な存在です。もちろん地元の友人も大切ですが、大学の友は志を同じくする仲間で、同じような職種に就職する人が多くいます。職場で同じような悩みやトラブルにあっているかもしれません。もちろん、職場内で解決できれば良いのですが、そう簡単にはいきません。是非、職場以外の友と交流を図り、色々な意見を聞ける人脈をこれからも大切にしてください。大学の友は生涯を通じた大切な仲間です。

これまでは授業を受ける受け身の姿勢でした。しかし、これからは積極性が求められる社会人になります。いろいろ失敗もするでしょう。その時に大学生活を思い出してください。友と共に困難を乗り越えて前進してきたのではありませんか。時には後ろを振り返り、失敗しながらも先を目指す。仲間と共に前に進む。社会人になると問題は一人で解決する必要があるかもしれませんが、大学時代を思いだし、勇気を持ってチャレンジして行ってください。

友達とお別れするのはさみしいことですが、これから新たにスタートする社会で、皆さんは様々な分野で活躍されることと思います。大学の仲間を思い出しつつ、社会人として次のステージでのご活躍を期待しています。悩みがあったらいつでも戻ってきてお話を聞かせてください。大学との絆は生涯の宝物です。

見ている方向へ進んでいく

地域社会学科准教授
小島　恵

私が初めて自動車の運転席に座ってエンジンをかけ、ハンドルを握ってアクセルを踏んだとき、隣に座っていた教官が言った。「進んでいく道路の真ん中をみてください。見ている方向へ進んでいきます。」教習所内につくられた緩やかなカーブを曲がるのに、どれだけハンドルをきれば良いのか見当もつかなかった私だったが、言われた通りに道の真ん中を見つめていたら、自然と少しずつハンドルを握っている腕が動いて、車がカーブに沿って曲がっていった。驚いた。眼と脳と腕の筋肉が勝手に連携してくれたおかげなのだろうと思うが、私にはとても印象的な経験だった。それから 20 年以上経ったいま、車の運転をするときにこの教官の言葉を思い出すことはないが、自分を含めた人間をみるときに思い出すことがある。人も同じだな、と思うのだ。素敵だな、と思う人と長く付き合っていると、その人の素敵さがこぼれ種のように、いつの間にか自分に少し根付いていることに気がついて嬉しくなるときがある。意地悪な人だな、と思いつつも我慢して一緒にいたりすると、いつの間にか自分が意地悪なウイルスに感染していることに気がつくときがある。なるほど、見ている方向へ進んでいくんだな、と妙に納得する。これから皆さんが行くところがどのようなところで、そこにどのような人がいるかは分からないが、このことを頭の片隅に置いておいてほしい。できれば、こんな風になりたいな、という人を見つけて、なるべく長い時間をその人と過ごした方がいい。5 年、10 年経ったときに、たぶん私の言いたかったことが分かってもらえるんじゃないかな、と思っている。

おくることば

比較文化学科准教授
水野　光朗

2024 年にリリースされた生成 AI(Felo) のプロンプトに、「比較文化学科を今年卒業する学生に 600 字程度でおくることばを書いてください。」と入力してみました。出力結果を下に示します。

卒業生の皆さん、このたびはご卒業、誠におめでとうございます。

比較文化学科での学びを終え、新たな一歩を踏み出す皆さんに、心からの祝福とエールを送ります。この学科での学びは、単なる知識の習得にとどまらず、異なる文化や価値観を理解し、多様性を尊重する力を育むものでした。皆さんがこれまでに培った視野の広さや柔軟な思考力は、これからの人生において大きな財産となることでしょう。

現代社会は、国境や文化の壁を越えたつながりがますます重要になっています。皆さんが学んだ異文化理解の力は、グローバルな場面だけでなく、地域社会や日常生活の中でも大いに役立つはずです。他者との違いを受け入れ、共に新しい価値を創造する力は、これからの社会をより良いものにする原動力となります。

これからの道のりでは、期待とともに、時には困難や迷いも訪れるかもしれません。しかし、比較文化学科での学びを通じて得た「多様な視点を持つ力」や「対話を通じて理解を深める力」は、どんな状況でも皆さんを支えてくれるはずです。失敗を恐れず、挑戦を楽しむ心を忘れずに、前に進んでください。

卒業はゴールではなく、新たなスタートです。これからの人生の中で、皆さんが自分自身の可能性を信じ、夢や目標に向かって歩み続けることを心から願っています。そして、どんなときも、自分らしさを大切にしてください。

最後に、皆さんの未来が希望に満ちたものであることを祈りつつ、これからのご活躍を心より期待しています。改めて、ご卒業おめでとうございます！

みなさんが本学で学んでいた間に、良い、悪い等、様々な評価がありますが、科学技術はここまで進みました。この「進歩」を受け入れるか、それとも、否定・排除するかが、問われています。そもそも、この問いに対する「正解」があるのかどうか。わたしたち一人ひとりの智慧が問われているように思います。卒業を機に学びをやめてしまうのではなく、学びつづけることが必要です。卒業を祝福すると同時に、新たな課題をお示しして、私からのはなむけの言葉といたします。

Lifelong Learner へ！

国際教育学科講師
前島　礼子

ご卒業おめでとうございます。

皆さんが入学した頃はまだコロナ禍の影響が色濃く、不安を抱えながらのスタートだったことでしょう。国際教育学科の特徴である欧州留学はできたものの、それまでの常識の全てが通用するわけではない中で、手探りで進めたことと思います。ですが、皆さんの旺盛な好奇心や積極性が原動力となり、世界史上の未曾有の事態をも乗り越え、無事に卒業に至ったことは本当に素晴らしい。

IB の教育目標の一つに Lifelong Learner の育成があります。大学卒業による学士号が最終学位になる人は今のところ多くいるはずですが、では学校、大学を卒業しても考え続け、学び続ける Lifelong Learner であるための秘訣は何でしょう？

人類の学問の歴史を古代から追いかけている私は、それが、文字を読んで言葉を入れることである、と断言できます。人間個人の経験体験だけで得られる知には限界があり、第一言葉がなければ個人の体験を言語化して時空を超えて他者に伝えることすらできません。物事は全て単体かつ目に見える形で存在するとは限らず、相互の関係性、関連性を読み解くには言語の幅が必須です。しかも、古今東西、文字というのは鍛えないと読めるようにはならないし、読まなくなれば悲しいくらい力が落ちます。

皆さん自身もこれから世界へと羽ばたくにあたり、いつでもどこでも、生涯考え、何かを学び続ける Lifelong Learner であるために、これからも幅広く読み続け、読みの能力を鍛え続けて欲しい。国際教育学科を卒業する皆さんであればきっとできるはずですよ。

アコヤ貝の苦しみ

大学院文学研究科　英語英米文学専攻教授
儀部　直樹

修士課程修了おめでとうございます。

過去に私はある方の語る人生論を拝聴する機会がありました。その時のメモの中からその内容の一部をご紹介します。「例えばアコヤ貝という貝は、貝の中に砂や小石などの異物が入ると苦しみます。しかしやがてアコヤ貝は、そうした異物を自らの粘液によってくるみ、固めて、見事な美しい真珠にします。なんとも言えない気品ある美しさを持つ真珠は、外からは何の欠点も無いように見えます。しかしアコヤ貝が見事な真珠を作り上げるためには『砂や小石が入ってアコヤ貝が苦しんだ』という事実が確かにあったのです。これと同様に私たちは人生という旅路において、時に登り坂を上り、時に降り坂を下り、何度も苦しみや悲しみを経験します。そうやって人は、人知れず涙を流したり汗をかいたりすることで、より優しくなり、より勇ましくなり、真珠のような『徳』というものを築き上げていくことができるのです。私たちの魂は試練を通して磨かれていくのです」。このアコヤ貝の喩え話は、修論を書き上げた皆さんにも当てはまります。皆さんは先生や学友に支えられながら授業や研究に、そして修論完成に向けて必死に取り組まれました。その過程は必ずしも万事順調というわけではなかったでしょう。とりわけ修論作成には、アコヤ貝が経験するような生みの苦しみが常に伴ったことでしょう。けれども、その分、皆さんと修論は真珠のようにきっと美しい輝きを放っていることでしょう。

様々な出会い

国文学科
宇田　深月

ゼミ合宿にて、恩師と仲間たち

都留文科大学で過ごした４年間は、己の人生に於ける重要な出会いに溢れていました。

もともと日本近代文学に興味を持って入学した私でしたが、種々の授業を受けて行く中で恩師の授業と出会い、ゼミを決めました。漢文学に関心はあれど、研究対象にするようになるとは、高校時代の私からは想像もつかないことでした。

また、部活動やアルバイトを通じて沢山の仲間と出会いました。気の合う者もそうでない者もいて、多寡はあれどもその皆から、それぞれのものの見方を教えてもらいました。己ひとりの尺度で物事を測らないこと、相手の考えを尊重することの重要性を叩き込まれ、人間的に非常に成長できたと思っています。

『三国志』の注の中に、「士別れて三日、即ち更に刮目して相待すべし」という言葉が引用されています。この言葉どおり、次に都留の皆様と出会えた日にはより成長した姿をお見せできるよう、努力を忘れずに日々邁進していく所存です。

最後になりましたが、お世話になった先生方、共に過ごしてくれた友人たち、学生生活を支えてくださった大学の方々、地域の方々に、心から感謝申し上げ、旅立ちの辞といたします。

From Tsuru to Future

英文学科
山内　勇人

苦労した教育実習と頑張った喜び

It is an honor to write this farewell message on behalf of the Department of English. Congratulations to you all! Take a moment to appreciate all the hard work you've done over the past four years—you truly deserve this accomplishment. I would also like to extend my gratitude to the families the teachers, and the friends who supported us.

Looking back on my time at Tsuru University, one of the most valuable lessons I've learned is the importance of building meaningful connections with others. Many of us entered this university in 2021, facing the uncertainty of being the first group to take the new entrance exam style and navigating the challenges of the COVID-19 pandemic. It was an anxious time for many of us. Yet, despite the restrictions in 2021, we were fortunate to have many face-to-face classes, allowing us to embark on this university journey alongside new friends. Over the years, through lectures, club activities, and part-time jobs, we've grown with the support of those around us.

On a personal note, my time at university allowed me to develop a deep passion for linguistics. This interest has inspired me to pursue graduate studies in linguistics in the U.K. Although jumping into a new environment will undoubtedly be challenging, I'm excited to embrace this next chapter of my life.

As each of you embarks on your own new journey, I hope our journeys will cross again one day. When they do, I look forward to saying with a smile, "It's been a while!" Until then, let's continue working hard and moving forward. Once again, congratulations to everyone, and best wishes for a bright and successful future!

素敵な出会いに恵まれた４年間

学校教育学科
國井　陽奈

親元から遠く離れて１人で暮らすことへの不安と、これから始まる新生活への期待を胸に都留へ引越してから、もうすぐ４年が経とうとしています。

４年間を通じてたくさんの子どもたちと関わり、子どもに寄り添う力がついたと実感しています。特に３年生でのSAT活動では、１年を通して子どもたちの成長を見守るという貴重な経験をすることができました。日々成長を続ける子どもたちの姿を見て、教員としてのやりがいを肌で感じることができました。加えて、小学校での学習支援員のアルバイトや学童でのアルバイトは、小学校との繋がりが強い都留文だからこそできた経験であったと思います。SAT活動やアルバイトを通して可愛い子どもたちと関わり続けることができ、幸せな時間を過ごすことができました。

大切な友人と

春から夢であった教員生活が始まりますが、この４年間、都留で培った力を存分に活かしていきたいと思います。最後になりますが、４年間支えてくれた家族、お世話になった先生方、共に学生生活を送った友人達へ、この場を借りて心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

４年間を振り返って　－かけがえのない経験と人生の宝物－

地域社会学科
高山　恭輔

入学式の日、期待と不安を胸に文大坂を登ったことがまるで昨日のようで、気がつけばあっという間に学生生活を終えました。私の学生生活は学業・部活動・アルバイトと非常に充実しており、余暇には学内の友人たちとドライブや旅行に行き、楽しい思い出をたくさんつくることができました。

部活動では合唱団に所属し、2023年度には運営幹部としての役職を担いました。幹部としてのプレッシャーもありましたが、清水先生や同期、後輩、先輩方の支えがあり、コンクールでは金賞という結果を残すことができました。また、今年最後のコンクールでは、この時間が「愛おしい」と思えるほど楽しく朗らかに歌うことができ、嬉しいことも悔しいことも一緒に乗り越えた仲間たちに恵まれたことを思うと、この４年間は人生の宝物です。

「負けないことは立派。負けたことに負けないことはなお立派。」これは、当時中学生だった私が恩師からいただいた言葉です。春からは異なる環境でひとつでも多くのことを学び、この信条を胸に日々精進していきたいと思います。

12/15 岐阜県中津川市演奏会にて、
男声＆清水先生と一緒に

最後に、時にやさしく厳しくご指導くださった先生方、支えてくれた家族、友人たち、そして合唱団の仲間たちに深く感謝申し上げます。

出会いが与えてくれたもの

比較文化学科
土田　遥

思い返せば１年生の頃の私は、熱中したいものと思うように出会えず、それを模索する日々を過ごしていました。そんな中、転機が訪れたのは１年生の冬でした。

今では部活仲間である友人との出会いがきっかけでアイスホッケー部に入部しました。ルールすらよく知らない競技でしたが、アイスホッケーが初めて触れるスポーツであるというのは他の部員も同じでした。仲間がいる、だからこそ私も挑戦する決断ができたのだと思います。

この仲間と過ごした３年間、何度自信を失って涙したか、そして仲間に慰められたか分かりません。それくらい、自分の努力を疑う瞬間を何度も経験しました。それでも、仲間と共に努力の先にある楽しさを見つけながら乗り越え、この瞬間を着実に成果に変えてきました。だからこそ本気になれたと心から言えるのだと思います。元々興味がなかった競技

気持ちを一つに！

にも関わらず、ここまで熱くなれたことを思うと「何をやるかよりも誰とやるか」が大切と言われる理由を知れた気がします。

この４年間で部活に限らず、一生懸命になれた時間は間違いなく、今後の自分をどこかで助けてくれる武器になると思います。そんな時間を過ごせた都留での生活は私の宝物です。最後に、これまで支え続けてくれた家族、ご指導くださった先生方、出会ってくれた友人に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

都留から世界へ　～ Global Educator への道～

国際教育学科
角田　万里愛

私にとって都留文科大学での学びは、今までの価値観から一歩飛び出して世界で学ぶ始まりでした。４年前、「国際バカロレア (IB) 教育を学びたい」「北欧で教育を学びたい」その一心で神戸から山梨に飛び込んで来ました。都留での生活は新しいことの連続で授業だけではなく、多様な背景を持つ仲間、先輩方、先生方と過ごす時間全てが学びそのものでした。特に、国際教育学科での学び、留学生のチューター、ダンスサークルなど様々な活動に取り組み、素敵な仲間と充実した日々を送った毎日は本当にかけがえのない思い出です。

文大生として都留、そして世界で学びました。交換留学先のスウェーデンの大学で半年間北欧教育を学び、長期休暇にはベトナム、韓国の学校でも自主的に教育実習を行い、仲間と共に日本中の IB 認定校でも実習をするなど、トータルで 20 校以上の学

留学中のクラスメイトとの写真

校で実習をしました。その中で沢山の児童生徒や教師の方々に出会い、「世界中の学校で教える教師になりたい」「日本と世界の文化を繋ぐ架け橋となる Global Educator を目指そう」と夢を見つけ４年間走り続けて来れました。素敵な出会いがあったから夢を持ち、夢で終わらせるのではなく、目標として実現し、これからも成長していきたいと強く思うようになりました。

卒業は未来へのスタートだと思います。いつか成長した姿でまた都留に仲間と戻って来たいです。

短歌連作「横書きのエンドロール（あるいは、ありふれた事々）」

大学院文学研究科　国文学専攻
松澤　海飛

「都留文科大学　恥ずかしい」というサジェスト　すぐそこに疾い雲
桃あげて桃さげないで桃さげてみたいに六年間は過ぎおり
雨の日に限って夕陽だけきれい　ありがとうって言ってみるだけ
赤色の煉瓦が桃色だとしても変わらない会釈の角度とか
エンパシー・イズ・マネー　ここは〈地方〉でも〈地方都市〉ではない健やかさ
独唱のようにあくびを噛み殺しコンビニは聖域にはならず
四捨五入しても高尾にならないよ　愛は勝つ、愛以外勝たない
僕だけが一ヶ月後にはいない街でチョコチップメロンパンを食べてる
どうしても背負いきれない分断の（といってもどこのスーパーに行くとかの）
たしかに有吉は老けない　うれしくて鳩になりたい土鳩ではなく
ありがとう夜中の散歩　ありがとう　髪が、風だから、仕方ないね
侍はエモい　昨日が一昨日になるときに詩はさらに詩的に
雨に匂いはあるけど雪にはあんまりなくて　逆立ちがよく似合うあなたは
笑ってもいいけど笑われたくはない　なのに横書きのエンドロールを
明日よりとおくに星を連れ去って空は２０１色目の白

永遠が見馴れた駅に降り立った
きっと明日はラララでルルる

僕の学生生活は、研究としても個人的な活動としても短歌と共に過ごしてきました。だからこそ、最後も短歌で締めさせてください。これは僕の６年間の学生生活に対する感想であり感傷でもあります。そして、すべての関わってくださった方々に感謝をこめて。

未来を築く６年

大学院文学研究科　英語英米文学専攻
弓野　敏滉

「Every day is a new day.」というヘミングウェイの言葉の通り、都留での６年間は刺激と変化に満ちた日々でした。多くの出会いに恵まれ、友人たちと過ごした時間はかけがえのない宝物です。夜遅くまで語り合い、お酒を酌み交わし、時には麻雀卓を囲んで人生観を語り合った日々は、研究成果と同じくらい私の人生を豊かにする財産です。

一方で、大学院での研究生活は挑戦の連続でした。偉大な作家たちの作品に触れ、いかにして文学を解釈するかの喜びを感じつつ、その奥深さに圧倒され、自分の力不足を痛感することもありました。講義で劣等感を覚える日もありましたが、「自分にできることは何か」と問い続け、粘り強く物事に向き合う姿勢を養うことができました。この経験は、学問を超えて私自身を大きく成長させてくれました。

振り返ってみると、この地で大学院進学を決意したことは、私の人生において重要な転機となりました。この６年間、困難もありましたが、最後までやり遂げた自分を誇りに思います。また、指導教員の儀部先生をはじめ、多くの先生方や出会った仲間たちの支えがあったからこそ、ここまで歩んでこられました。心より感謝の気持ちを伝えたいと思います。

二年間お世話になった研究室

これからも新たな挑戦を恐れず歩み続け、学んだ知識や経験を次の世代へ還元していきます。

修了にあたって

大学院文学研究科　比較文化専攻
村松　由香子

学部を卒業した 38 年前、当時卒業生のほとんどが教職につく中、私は一般企業へ就職しました。会社員としては海外勤務や単身赴任・転職も経験しました。この間に三人の子どもと一つの会社を産み育てました。現在は静岡県焼津市の中学校において外国につながる子どもたちの日本語支援員として働いています。大学院で学ぼうと思ったのは、コロナ禍が落ち着き、うまくいかないいろいろなことを、もうコロナのせいにはできなくなったと悟ったからです。

週２回、高速で片道２時間の通学は体力的にハードでしたが学ぶことがいかに贅沢なことかを実感できる時間でもありました。

この二年間で「日本語教育能力検定試験」と、国家資格となる「日本語教員試験」に合格しました。

吉田のうどん

通学途中にはうどん屋さんに立ち寄り「吉田のうどんマイスター」にも認定されました。Amazon での書籍購入額は約６０万円、体重はどういうわけか５kg ほど増加しました。

学部時代には考えもしなかった「学ぶよろこび」に満ちた二年間でした。再び学ぶ機会を与えてくださった都留の先生方と家族に感謝を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

バスに揺られて

大学院文学研究科　臨床教育実践学専攻
高橋　志緒

教師になる自信がない、その思いが大学院進学の最大の理由でした。それは「遠回り」とも言える選択だったのかもしれません。「遠回り」という言葉には、どこか逃げ道のような響きがありますが、私にとってその道は、想像以上にでこぼこで、時には自ら乗り込んだはずのバスから降りたいような気持ちに駆られることもありました。バスの窓から見える景色には、教育の希望も絶望も映り込んでいました。言葉には代えられない景色に出会うたびに、自分の無知や無力さに直面し、葛藤する日々を重ねました。それでも、異なる背景を持ちながらも同じ志を追い求める心強い同期や、教育に向き合い続ける先生方と共に、少しずつ、しかし着実に希望を紡いできました。

そして今、そのバスに揺られる時間が終わろうとしています。これからは、子どもたちを導くと同時に、共に学び、成長していきます。

院生室の窓から

最後に、遠回りを受け入れてくれた両親、より良い道標を示してくださった先生方、そして一緒にたくさんの寄り道をしてくれた同期に、心から感謝を伝えたいと思います。同期の二人へ―これからは別々のバスに乗るけれど、それぞれが見た景色を語り合って、また沢山寄り道しようね。

令和6年度　卒業論文・修士論文題目

氏名表記については、原則本学学内システムで使用の「JIS 第一水準および第二水準」で表示可能な文字で表記しています。

国 文 学 科

上代文学　小村　宏史ゼミ

麻生　佑佳　額田王論―蒲生野贈答歌をめぐって―
今水流瑠華　『万葉集』における親子
榎本　彩乃　『日本霊異記』にみる異類婚
大伴　涼香　古事記における黄泉国
島田　史能　『古事記』に見る須佐之男命の神性
武田　実咲　天智天皇挽歌群の考察～上代人にとっての死と挽歌～
寺尾　洸亮　『古事記』におけるイザナミの果たす役割
二村　紘衣　古事記における「美」「醜」表現の意義
米澤　明希　山部赤人の春の歌四首について

中古文学　長瀬　由美ゼミ

村田　遥香　『源氏物語』における紫の上の人物造型
大井　美緒　『源氏物語』における死霊六条御息所登場の意義
小野田菜月　平安文学と狂言綺語―『源氏物語』と紫式部の思想について―
片田　光風　『源氏物語』における女君の死の役割―光源氏との死別を中心に―
川邊　有咲　『源氏物語』における物の怪発現の効果について
河本　萌香　『今とりかへばや』における宰相中将の人物像とその役割
高松　玲奈　『落窪物語』における北の方の人物像と役割
深井　彩可　『古今和歌集』春歌・秋歌における植物の役割
武藤　麻生　『今昔物語集』の成立と後世への影響
松山愛里香　源氏物語における仏教思想―薫の道心と出家をめぐって―
道上　　愛　古典教育における『源氏物語』教材の位置づけと意義
矢野　桃菜　角田光代訳『源氏物語』にみる平安期と近代の婦人観―雨夜の品定めを中心として―
山本　留未　『源氏物語』における四季の様相

中世文学　佐藤　明浩ゼミ

湯浅　眞綸　西行の月の和歌について
奈良　卓磨　「小松」を詠む歌について
伊藤　由弥　藤原定家の編著にみる業平歌受容について
伊藤　璃虹　静御前の歌の解釈―「作者－歌手－聴衆」の関係をめぐって―
加古原萌伊　『とりかへばや物語』における主人公きょうだいの比較から考える男主人公の特徴について
菊池　美帆　式子内親王「たまのをよ」歌の解釈と謡曲における享受
佐々木和月　秀歌撰における女性歌人の歌―歌仙絵とのかかわりから―
堀内安寿香　崇徳院「瀬をはやみ」歌の配列からみる解釈
柳澤　未夢　和泉式部の「夢」の表現

近世文学　加藤　敦子ゼミ

笹崎　真羽　『西山物語』における季節表現
加藤　元彦　『〈うどん／そば〉化物大江山』における擬人化の効果
北村　　颯　「白峯」における西行の〈魔仏一如〉観の獲得―「よしや君」の歌に着目して―
佐々木果歩　十返舎一九『初登山手習方帖』の手法
庄司　莉澄　『西鶴諸国ばなし』巻一の三「大晦日はあはぬ算用」の手法―物語の構造と浪人という設定に着目して―
鈴木　慶一　『世間胸算用』の構造―教訓による読み手の視点設定の効果―
林　　朋希　『雨月物語』における人間から変じてしまった存在
東野　春花　紀海音世話物浄瑠璃における母・おばの役割
岩下　　茜　『大石兵六夢物語』における謡曲の利用

近代文学　古川　裕佳ゼミ

蜜澤　杏夏　川端康成『美しさと哀しみと』論
吉田陽奈子　三島由紀夫『真夏の死』論
折井　七望　江戸川乱歩「人でなしの恋」論
守安由佳莉　安部公房『箱男』論
渡邊　美依　小酒井不木少年科学探偵論―『髭の謎』を中心に―
照井保乃華　谷崎潤一郎『青塚氏の話』論
中川　弥旺　芥川龍之介「老いたる素戔嗚尊」論

近代文学　野口　哲也ゼミ

井上　和之　梶井基次郎「桜の樹の下には」論―憂鬱な闘争の果て―
関　　花衣　有島武郎「カインの末裔」論―〈奪う愛〉の実践的投影―
安部　由乃　抽象化の詩学―立原道造『暁と夕の詩』考―
石田　成海　太宰治「人間失格」論―道化の語りと許し―

川原田宙奏　坂口安吾「桜の森の満開の下」論—欲望と絶対の孤独—
河野　日菜　「夫婦善哉」論—小説家・織田作之助の原点—
田口　文菜　泉鏡花「薬草取」論—不透明な家族観—
武田　響生　芥川龍之介「歯車」論—「僕」の視界に広がる世界—
陳　丹鳳　『潮騒』論—三島由紀夫の理想世界
照井　秀平　谷崎潤一郎「神童」論—「天才」という病魔と自意識の輪郭—
内藤　汐里　佐藤春夫「田園の憂鬱」論—侵食する憂鬱—
中村　優里　三島由紀夫「憂国」論—死あるがゆえの至高—
藤本　実佑　太宰治「駈込み訴へ」論—理想と現実の揺らぎ—

近代文学　吉田　恵理ゼミ

金子　詩穂　勇嶺薫『赤い夢の迷宮』論—はやみねチルドレンの悪夢—
竹中えりか　北原白秋『海豹と雲』論—「神」に表現されるもの—
有馬さつき　草野心平『日本沙漠』のなかの「蛙」詩
太田　博菜　川上弘美『センセイの鞄』論—「恋愛を前提とした」唯一の関係
木村　一葉　吉屋信子『わすれなぐさ』における女の〈友情〉
河野枝里子　宮沢賢治『銀河鉄道の夜』論—自己犠牲と「ほんたうのさいはひ」—
櫻井　朱里　伊藤計劃『ハーモニー』論—現代 SF とポストヒューマン時代の〈女の子〉の身体
鷲見　翼　太宰治「駈込み訴へ」における全体と個人の対立
芹澤　明星　中原中也「朝の歌」論—詩の形式と「歌」
高野　一花　西加奈子『円卓』論—声と文字のあいだ
宮原さくら　太宰治「待つ」論—弱者に寄り添う文学—
村田　結　入沢康夫『ランゲルハンス氏の島』論—「擬物語詩」の可能性—
毛利　来夢　中島敦「文字禍」論—語られる文字の霊—
米倉　理沙　安部公房「S- カルマ氏の犯罪」論—「名前」と「獣」—

国語学古代語　加藤　浩司ゼミ

篠原　宇貴　恐怖を表わす動詞の変遷　–「恐れる」「怖がる」を中心に –
入部　千尋　助動詞キのカ変・サ変に対する特殊接続の変遷
内山　双葉　「クチサキラ」を中心とした動物の口部分を表す語の変遷
小俣南々泉　「かならずしも」の用法の変遷　– 否定を伴う「かならず」の用法と比較して –
髙木　美音　今様における特殊音のあらわれ方

国語学近代語　早野　慎吾・泉　大輔ゼミ

安藤　聡子　愛媛県松山市の気づかない方言—中学生・大学生の方言認識—
木村　美咲　日本の男性アイドル文化について—雑誌「Myojo」研究より—
佐田　実咲　漫画を活かした国語教育—あすなひろし作品を例に—
中神　和華　惣流・アスカ・ラングレーと式波・アスカ・ラングレーからみるエヴァンゲリオン
西山　千優　日本のコリアンタウンの言語景観
野田　沙菜　漫画における帯の広告内容について
野村　匠起　仮面ライダーから悲しみを考える
畑中　美優　ジョジョの奇妙な冒険第 3 部から考える擬音語・擬態語の英訳手法
廣松　雅　ディズニー映画『ノートルダムの鐘』の日本語字幕と日本語吹き替えの比較—挿入歌を中心に—
藤田怜央奈　アニメ『おねがいマイメロディ』におけるキャラクターの発話と人物像
星　聡子　都留文科大学キャンパスことば集　2024 年—国文学科を中心に—
細川　舞羽　茨城県の 30 年での語彙使用の変化
湯川　桃羽　長野県長野市における方言使用について—長野の「気づかない方言」—

漢文学　寺門　日出男ゼミ

高橋くるみ　管晏列伝に見る史記の文学観
宇田　深月　中国史における「法家観」
小林萌々果　『太平広記』豪侠部について
瀧本　桜　白居易の奏状について
外山　春陽　范曄の歴史観—方術列伝という観点から—
鈴木　彩生　杜甫詩における風雨表現

国語教育学　野中　潤ゼミ

安部　詩音　舞台『文豪とアルケミスト』の教育的価値と文学再興—文学を次世代へ繋ぐ試み
井川　怜南　モキュメンタリーホラーが想像力に与える影響
井口　凜　文学国語の意義と役割
稲本　早夏　俳句教育を通じた「伝え合う力」の向上—言葉の感受性を通じた自己表現と他者理解の教育的意義—
大高帆乃華　文学教材指導における生成 AI の活用と位置づけ～「舞姫」の教材的価値から～
尾崎　紗雪　国語教育における ICT 機器と生成系 AI の活用～芥川龍之介「羅生門」の授業実践の考案とその効果～
栗田　花帆　異文化作品の翻訳における忠実さと創造性のバランス—『ハリー・ポッター』シリーズの日本語版を事例に—
新堀　朔也　国語科教材における生成 AI の可能性～教科書教材と AI 教材の意義および新たな教育のかたちへの対応～
谷口　雪　パーソナルライティングの持つ可能性—高校国語科における意義と生徒へもたらす効果について—
長岡　芽依　松田聖子の楽曲における松本隆の歌詞研究
久松　志保　批判的思考力を育成する学校教育とはいかなるものか—IB 教育における TOK に着目して—
望月　七聖　はやみねかおる作品の研究—受容と消費の広がり—
守屋　侑実　国語教育における多様なアイデンティティの尊重—LGBTQ 生徒と非当事者生徒が共に学びやすい授業づくりの方法—

日本文化　大村　梓ゼミ

勝俣　理子　日本におけるチェーホフ『三人姉妹』受容
小野崎智花　江戸川乱歩「人間椅子」論—「ぶきみ」を内包する恋の成立—
北島有理沙　日本におけるヴェルレーヌ受容—中原中也とヴェルレーヌの音楽性—
小林　航大　村上春樹『1973 年のピンボール』論—物語るための「ピンボール」

齊藤　日和　日本におけるゴッホ受容—雑誌『白樺』と武者小路実篤—
佐藤　乙羽　江戸川乱歩『押絵と旅する男』論—現実と幻想の境界線—
鈴木　波奈　安吾作品に見られるダダ的性質と思想性
高見澤ゆずか　芥川龍之介「鼻」論—自意識の描写と現代性—

田口はるな　濱口竜介の『ドライブ・マイ・カー』—村上春樹「ドライブ・マイ・カー」からの翻案—
成澤　舞　太宰治『人間失格』再読～語りの巧みさに注目して～
野中　理名　高村光太郎『智恵子抄』論—光太郎の芸術観と「智恵子」の美しさ—
藤尾　和奏　原民喜『夏の花』における私小説性—被爆体験はどのように受容されたのか—
前川　桂佑　永井荷風の洋楽受容—本場の音楽を聴いた日本人—
松下　尚路　届かない言葉—中上健次「一番はじめの出来事」論—

英　文　学　科

加藤　めぐみゼミ

大西　翔馬　夫婦が幸せな生活を送るには——ヴァージニア・ウルフが描く結婚
相川　紘香　ハリー・ポッターにおけるジェンダー的価値観の形成
青木　聖奈　ディストピアへの抵抗——自分らしくあるために
内谷　桃花　Sisterhood Under Post Feminism :"Witch"as a Role Model
岡本　夢歩　ロアルド・ダールが描くブラックユーモアとトラウマ体験の関連性
鷲見　隆太　『モル・フランダーズ』に見るダニエル・デフォーのリアリズム
高橋　遥　*Me Before You* における安楽死の尊厳と自由
谷生　亜弥　『ピーター・パン』と『ウィキッド』に見る、緑の象徴と異世界の役割 ： 現代を生きる私たちへの示唆
辻村　佳音　『嵐が丘』に見る、出自と恋愛観の関係性
徳田　花奈　カズオ・イシグロ文学から見るテクノロジーの発展と「人間」の尊厳
中原　桃子　悲劇『リア王』における愛の価値について
兵頭　春香　人間らしさとは何か——カズオ・イシグロの作品における生命倫理とテクノロジーの葛藤
安留　京佑　日常に蔓延る支配意識——ジョージ・オーウェルが警戒した社会で生きるためには
渡邊　理那　恋愛とアイデンティティ形成——『高慢と偏見』と『傲慢と善良』における個人成長の比較

小室　龍之介ゼミ

飯田　美咲　『オリヴァー・ツイスト』からみるイギリスの貧困問題
岩村　梨夏　シャーロット・ブロンテの理想の女性像と結婚観
河原　総　オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』における耽美主義
木下　達矢　Rooted in the Land : Lafcadio Hearn’s Ecological Meditation on Harmony and Humility
野澤可南美　『蠅の王』から見る人間の本能と心理
橋原　雪乃　『ハムレット』における復讐の正当性
藤田　紗生　『波』にみえる意識の流れ
本田　生磨　怨霊と妖怪が織りなす恐怖の象徴 -「耳なし芳一」と「雪女」の文化的背景 -
柳岡　龍馬　『秘密の花園』メアリーから見るアイデンティティの形成
山口　来楽　『ジキル博士とハイド氏』に見る二面性と生徒指導における自己理解支援
山本　拓実　なぜ偽りを得選ぶのか ～ マイケル・ジャクソンから読み解くポピュラー音楽 ～

儀部　直樹ゼミ

菊池　桃子　Collective Harmony versus Individual Happiness : A Cross-Cultural Analysis of Japanese Collectivism and Its Impact on Psychological well-being in Global Context
長根　碧　親子関係における「成熟した愛」の実践と子どもの発達への影響
和田　有未　「死者の日」から考える死との向き合い方

有川　響　命を自ら断つことをなぜ選択してはいけないのか ～現状の混迷する死生観と命の選択を考える ～
磯島　穂佳　精神的ウェルビーイングの実践とカスタマーハラスメント問題
伊藤　愛唯　意識体からのメッセージ～故人の存在と生者への影響 ～
加藤日夏莉　孤独による病と愛への気づき：*A Man Called Ove* からの考察
越坂　友陽　生きがいから考える幸福と自己実現
児嶋あいな　ミッチ・アルボムの作品からみる死生観
杉山　知寛　小説創作「主人公が死を通して成長する（変わっていく）物語」～ 君が取り戻してくれた贈り物 ～
中里さゆり　ソウルメイト概念の変遷と現代的解釈 ～ SNS 時代における運命の絆の新しい形 ～
服部　里美　内なる疎外　分裂しゆく社会と自己
浜砂　晴香　戦争が形作る死生観 ～ 戦争が人間の価値観に与える影響 ～
望月　郁吹　死別を経験した子どものケアと「死」を扱う児童図書の活用
和田　耕育　死後の世界についての考察

竹島　達也・石本　瑞子ゼミ

西村　翔伍　*Between Riverside and Crazy* における人種問題と個の対話
長田　優衣　*12 Years a Slave* にみる黒人奴隷制度
齋藤　夕姫　映画『ノートルダムの鐘』と小説『ノートル＝ダム・ド・パリ』の比較から見る愛と執着・宿命とは
堀　琴美　ポストモダン都市としてのニューヨーク - *City of Glass* をめぐって
横谷　琴音　『アルジャーノンに花束を』における「知能」のあり方を巡って
吉田　育美　『セールスマンの死』におけるアメリカン・ドリームと自己意識

中地　幸ゼミ

長田　安寿　映画 *Water* に見るインドにおける女性差別 ～ フェミニズム視点からの考察 ～
佐藤　美和　*The Boys on the Rock* からみるゲイの歴史
菅原　美玖　黒人霊歌研究 - *The Book of American Negro Spirituals* (1925) を中心に
関口ひかり　*Beloved* における黒人女性差別について

鷲　直仁ゼミ

夏目　順平　アラブ系移民による音楽制作
伊熊　飛勇　視点取得による道徳的普遍主義の構築
榎本　拓真　日本と英国におけるファッションの文化的・歴史的比較
大久保岳流　日本と英語圏の顔文字・絵文字の分析と文化的差異への対応
樫木蒼一郎　103 万円の壁が大学生の労働意識に与える影響：政策的背景とその改善可能性　海外との比較
柏　孔太　イギリスにおける人種差別と美術の結びつき
鍛　浩生　フランス印象派と自然描写の詩
坂元　猛斗　印象派・ポスト印象派の歴史について - 彼らが成した「芸術における功績・影響」を考える
中島　菜緒　絵画から見る犬 - 西洋と日本の比較 -
長田　マルセリーノ　太陽　Behind the Scenes - 絵画に現れる英国と日本の文化 -
姫路　涼花　日本画と西洋絵画における傘の描かれ方の違いについて
福野　真優　アメリカ・イギリス及び日本でみる人種と経済格差について
宮腰　乙女　映画・アニメの視点から捉える、イギリスと日本のポップカルチャーの相互影響について
宮本　佳果　富士山と浮世絵 - 西洋への影響 -
桑名　衣音　Comparative Analysis of British Paintings from the 13th to 18th Centuries : Shifts in Cultural and Artistic Trends

Gillies, Hamish Edward ゼミ

田中　卓司　The relation between English variety preferences and types of motivation for learning English among Japanese university students
星原　宇志　The impact of translanguaging use in the multilingual English classroom
米山　太一　Student working holiday: Reasons behind hesitation to go out of Japan
伊関アンナ　Classroom situation: Emphasizing interaction in language acquisition
加藤まるみ　The effect of color on learning language : Looking from a perspective of synesthesia
桑原　駿　How do technology tools, such as apps and online platforms, contribute to motivation in English language learning ?
貞光　和佳　Early English education and the future of English education in Japan
清水佳菜恵　Formulaic idiom learning strategies for Japanese EFL students
中村心乃美　Relationships between people's personality and their way of learning to speak English
西川　瑠夏　The interaction between turning points and motivation in language learning
西田莉久里　Second language acquisition: Exploring motivational effects of foreign movies and music
三森　駿介　The role of Japanglish words in English education in Japan: Investigating Japanese students' perceptions of Japanglish words

Olagboyega, Kolawole Waziri ゼミ

高野すみれ　A Comparative Study of the Differences between Japanese English and Canadian English
尾山　琴音　Language and Social Class ～ Social Class System in Japan ～
上條　花梨　The Effects of Religion on People
川村菜々子　The Differences Between British and American Englishes
神田　愛羽　Factors Responsible for Lower English Proficiency in Japan
清水　美南　English in the Expanding Circle Countries - The case of English in Korea -

鈴木千紗都	Racial Discrimination in Asia
長澤　麻衣	Culture and Personalities A Study of Intercultural Communication
望月　花菜	The English Varieties of Southeast Asian Countries
三好　知紘	Effective Motivational Strategies for Japanese In-service Personnel

三浦　幸子ゼミ

天野　　遼	Effects and Challenges of Utilizing YouTube Caption Generation for EFL Learning : An Analysis of the Impact of Content Selection Based on Learner Interest and Motivation
川島　有人	Exploring in-Flight Customer Service Based on the Differences between Hospitality and Omotenashi
奥村　佑次	An Analysis of the Relationship between the Instruction of the Etymology and English Vocabulary Learning
小池優妃香	Effective Feedback to Help Students Correct Their Own Utterances
小原　穂栞	The Significance of Introducing Debate in English Classes
斉藤　成穂	Exploring the Effects of Rubrics on Scoring Writing
寒河江優歩	A Study on Learners' Uptake to Recast
新川　　琴	Effects of Content and Language Integrated Learning on Learners' Instinct Motivation in Elementary Schools
杉原亜衣梨	Exploring Authenticity in Listening Tests for Junior High School Students
鈴木優之輔	How to Make Reading Activities More Interactive in Classrooms Focusing on Teacher Questioning
谷口　陽菜	Changes in Speaking Activities in Junior High School Textbooks
戸沼　龍暉	Differences in Speaking Skills Improved with Different Speaking Activities
服部　　隼	A Study of Teaching Pronunciation in Junior High School English Classrooms in Japan : Considering Segments to Priorities Based on Intelligible English Pronunciation and Contemporary Standard English Indicated by MEXT
松ヶ下陽満	Effects of Project Based Learning in Junior High School English Classrooms : Proposals for Future English Education from the Perspective of Language Acquisition and Education
松久　美羽	Exploring Ways of Building Creative Organization
本多　　麗	Classroom Practices and Strategies of Motivational Teachers

加太　康孝ゼミ

今泉　奏恵	『ガラスの動物園』における現実からの逃走 - 語りの構造における現実と虚構との境界に着目して -
上原　璃央	事なかれ主義ニックが唯一事なかれを通せなかった男ギャツビー
大石　　稜	快楽か自由か？ -『すばらしい新世界』に描かれる科学技術の発達と人間らしさ
太田　静流	*Frankenstein* における「怪物」の変容 - 神話的原型から現代の象徴へ
木村　隆晟	奴隷貿易とキリスト教の関係 - オラウダ・イクイアーノが自伝に隠したもの
杓谷帆乃香	*The Age of Innocence* に描かれるオールド・ニューヨークおよびそこからの逃避
高橋　日向	『赤毛のアン』は典型的な成長小説なのか - アン・シャーリーの物語に描かれる女性の可能性
成田いぶき	『17 歳のカルテ』に描かれる精神病療法の曖昧さ - 患者が抱く不信感の表現に着目して -

堤　博一ゼミ

宮里　哲都	日本語と英語の比較・対照に基づくバスケットボール実況の分析
山内　勇人	否定極性項目の認可条件の研究
岩木　小夏	日本語における身体語彙を用いた慣用句の研究
安富　優七	日本語と英語の対照による文の右端要素の談話特性の研究

Berning, Brian ゼミ

青山　千智	Improving student motivation in English speech and speaking classes for teachers
飯塚　　至	English learning demotivation in English teaching course students at a Japanese university
大屋　愛莉	CLIL preparation : Perceptions of Japanese university English teacher course students
奥山　華帆	Differences in difficulty perceived by Japanese when learning Korean and Spanish
田村爽瑶和	High school students' perspectives on English classes after curriculum revision : A comparative analysis of native and non-native teachers

学校教育学科

新井　仁ゼミ

稲垣ひかる　立体図形の展開図の教育的価値に関する研究－立方体の展開図に焦点を当てて－
扇下　　凌　量の概念形成と単位の指導のあり方に関する研究－教科書の比較分析を通して－
加藤　　翼　算数・数学教育における生成 AI がもたらす影響に関する一考察
木村　茉莉　算数・数学教育で求められる探究的な学習のあり方に関する研究
木村　優希　子どもの思考を豊かにする「算数脳」に関する研究
神津　京佑　空間概念を豊かにする図形教育のあり方に関する研究－折り紙ユニットの活用の可能性－
田中　　朱　数学的要素を含んだマジックの素材分析と教材化に関する研究
辻　安理沙　算数・数学の授業における ICT 端末の有効性に関する研究－関数領域の指導に焦点を当てて－
成田　遥南　数学的思考力の育成におけるパズルの有効性と活用に関する研究－「ハノイの塔」の仕組みに着目して－
長谷川幸香　児童・生徒が苦手とする算数・数学の問題と要因分析－全国学力・学習状況調査から－
前田　愛理　平面図形の求積に関する素材分析と発展的な扱いに関する研究
山北　怜奈　日本とフィンランドの算数・数学教育の比較研究

市原　学ゼミ

秋山　謙志　小学校現場における同調圧力の可否
清水　暢哉　怒り感情が反応時間にもたらす変化について
助川明日香　SNS 依存と実生活における充実感の関連
生海　紅実　自己受容と他者受容における地域差の影響－ Big Five 性格特性との関連性の検討
武内絵莉奈　いじめの加害経験が囚人のジレンマにおいて他者との協力に及ぼす影響
野呂紗千乃　いじめの加害経験が囚人のジレンマにおいて他者との協力に及ぼす影響

内山　美恵子ゼミ

木下由美子　日本と海外における災害避難所の運営についての比較と提言
久保　翔誠　教員の負担の少ない教材の考案とそれを用いた学習指導案作成　－小学校第 5 学年理科「流れる水のはたらき」－
小宮山　資　八ヶ岳西麓に分布する軽石流の岩相変化
田中　沙季　山梨県都留市 大幡川の流量比較とその要因
寺井　友那　令和 6 年能登半島地震から学ぶ地震防災教育の提案
稗田　美幸　火山の噴火と災害を現実的に捉えることができる指導案の作成
平松　建吾　山梨県都留市 大幡川の流量比較とその要因

岡野　恵司ゼミ

赤川　大志　汎魔方陣の解き方－魔方陣の規則性について－
市川　　駿　バスケットボールにおけるハーフタイムの点差による最終的な勝率－身長とフリースロ成功率の相関関係－
川元　結愛　格子多角形と格子点
小池　志歩　微分方程式を使って物理現象を考える
齋藤　百葉　三角形の魅力
佐々木遥陽　さまざまな公式や図形と黄金比
塩澤　颯斗　美しい多面体
正林　大和　アルキメデス『方法』に示された求積法について
森　　駿介　シェルピンスキー数について

春日　由香ゼミ

石原　心路　言語意識をはたらかせて「書く」ということ－「書く」ことによって、人はどう変容するのか－
紀室　俊光　小学校国語科における「ドラマ教育」の可能性
草場　　遥　全ての児童に居場所を作るインクルーシブな国語科授業についての検討
近藤　　遥　「読書へのアニマシオン」の在り方の検討－日本における読書指導に着目して－
坂本　桃加　日記を書くということ　－ＩＣＴを活用した日記の可能性－
田邉　　彰　小学校国語科教材におけるＬＧＢＴＱ＋の統合と意義　－ステレオタイプを越えるための取り組み－
山田理沙子　「絵本の読み聞かせ」を小学校の教室で行う

加藤　優ゼミ

赤井　円香　性格とスポーツがレジリエンスに与える影響について
赤石　璃星　『推し活』が幸福感に及ぼす影響－都留文科大学生の余暇活動に着目して－
伊藤　愛子　セクシャルマイノリティと学校現場のこれから
上田　遥菜　地域性から見たスポーツライフ実態のジェンダー分析
東風平愛美　都留文科大学生のひとりでいられる能力（the Capacity to Be Alone;CBA）と主観的幸福感の比較研究
清水　夏海　貧血と食行動の関連について－都留文大学女子学生の一人暮らしに着目して－
前田　佳子　スマートフォンの視覚的存在と咀嚼行為が心理的・認知的に与える影響
－大学生における学習パフォーマンスを比較して－

瓦林　亜希子ゼミ

石塚　菜摘	語り合う子どもたちでつくる学級－共に学び繋がり合う「ジェネレーター」を目指して－
大矢　美贈	子どもの主体性を保障する授業づくり－子どもの「問い」から始まる学び－
片平　風花	「子ども文化」中心の教育－子どもの思いから創り出す生活空間に根差した学級－
塩澤　美希	幼少期における「遊び」と「学び」の関連性－遊びと学びをつなげるために－
古畑　一輝	「生涯学習者」を育てる主体的な学びに関する考察－子どもの自由な表現を保障する「場」を創る－
松林　裕香	学校を子どもの居場所に－自由な表現・自己肯定感・自己有用感を育む教室－
吉田　　蓮	日常生活に根ざした道徳教育－子ども自身が考え、議論する授業－

上原　明子ゼミ

梶山　綾伽	日本の英語教育における小中連携
桑内　璃胡	CLIL と日本の小学校英語教育
末武　美咲	小学校英語教育におけるフォニックス指導
田中　悠介	英語教育におけるアクティブ・ラーニング
三上　結衣	小学校英語教育における英語絵本の活用
山本　　創	小学校外国語教育における動機付け
吉田皓之介	小学校外国語活動・外国語科における国際教育

菊地　優美ゼミ

亀田　詩織	住野よる『君の膵臓をたべたい』論－「僕」が桜良の死を語る意味とは－
菊地　　南	今西祐行「一つの花」論－教室での読みを深めるために－
木村仁知翔	村上春樹「鏡」論－「僕」が自ら恐怖体験を語る意味－
小林　晃大	言語化能力の育成を目指す漫画教材の検討－『ハイキュー』『SPY × FAMILY』を通して－
小林　萌花	今村夏子『むらさきのスカートの女』論－語りから見える「わたし」の真意とは－
戸部　　葵	島本理生『ファーストラヴ』論－環境が人格形成に与える影響に着目して－

佐藤　隆ゼミ

市村　愛子	日本の若者における現代のＭＢＴＩの役割
鈴木　翔大	子どもの外遊びの現状と課題
高橋　美月	『自己の育ち』を支える教育の在り方 －自由の森学園の実践から－
中村　文哉	子どもの中の「自己」と「他者」をつくる教育
三木峻太朗	小学校におけるＧＩＧＡスクール構想下のＩＣＴ活用指導力確保の課題
村田　幸呼	面白い授業は「問い」から生まれる
吉成　柊歩	災害と教育から信頼できる教師の像を考える
渡部菜奈子	少人数学級と子どもの育ち

清水　雅彦ゼミ

甘利　花音	「協働」の視点からみた音楽
田口　雄海	音楽教育とコミュニケーションについて
堀口　芽生	人の心を繋ぐ音楽
森　　音葉	小学校音楽科における「音楽あそび」

進藤　兵ゼミ

縣　　幸輝	三島市における移住・定住政策の効果と課題について
柏木　美汐	日本の気候変動対策を推進していくための行政の役割－市町村の取り組みから考える－
出口　颯大	都立高校改革における定時制高校
幅上　和樹	歴史教科書の国際比較から日本の歴史教育について考える
本間　海花	佐渡市が持続可能な地域に成長するために
宮林　晃雅	子どもの貧困問題とその解消に向けて

十川　菜穂ゼミ

清水　　萌	児童の学習意欲の維持及び向上を促す音環境づくり－音響心理学を中心とする心理学の観点から
中川のどか	「音楽づくり」における、豊かな表現力を育てるための指導の工夫
藤村　海妥	オーケストラの可能性－学校教育を通してその魅力を伝えるために
物井　葉南	音楽がもたらす心理的影響について

平　和香子ゼミ

入船　綾菜	外国人児童生徒の課題と検討
岩間　祐果	教職課程における給食指導教育の必要性
大川　玲子	富士山学習における御師料理の教育的活用法について
河野　凪紗	災害時における食物アレルギー患者への対応と課題
篠塚　梨乃	大学生における超加工食品摂取の意識と行動との関連性
蓮岡　七穂	ブラックカラーウェディングドレスの社会的認知に関する研究
濱野ともか	仮想空間における身体文化としての被服製作技術
藤井優太郎	献立表の持つ食育効果の検討

竹下　勝雄ゼミ

青柳　優杏	寄り添う「教育」の在り方について
金井那津美	低学年における鑑賞教育の導入についての一考察
岸川　　音	小学校低学年の視覚障害児に対する図画工作の教育的効果
奈良　桃伽	図画工作とＩＣＴを関連させた教材開発
新田　隼大	中学校美術教育における色彩感覚に関する考察
柳本　優香	インクルーシブ教育における共同制作の可能性

筒井　潤子ゼミ

相田　琴星	「いい子」について考える　－ありのままの自分でいるために－
片岡　鈴々	大学生の SNS 使用が精神的健康に与える影響
清水　りお	特別支援教育の観点から見る共生社会の実現
新保　　詩	絵本の持つ力　－子どもの視点と大人の視点から－
高橋　愛生	なぜ人は『性格診断』に魅力を感じるのか　－ 16personalitites の流行を通して考える－
田原　秀英	AI とのコミュニケーションが人間とのコミュニケーションに置き換わるのか？
中川　千里	いじめについて考える
村田　統也	正義と暴力の葛藤

堤　英俊ゼミ

岡本　彩佑	だれもが「もやもや」と向き合える授業づくり－小学校における算数指導を手がかりに－
楠　　彩菜	地域を自分事として捉える見方を育む－小学校高学年における地域学習のあり方－
桑原　佳苗	「親しみ」にこだわる学級づくり－朝の会における毎日レクの工夫を通して－
後藤　愛美	自分のことばで伝え合う学級づくり－授業の中での班活動のつくり方に着目して－
但馬　晴奈	多様な声が調和する学級づくり－給食場面に着目して－
田村　宗大	「自分なりのことば」で表現することを教える－日記指導に着目して－
森田惣一郎	「正対すること」を体験する授業づくり－小学校でのスポーツチャンバラの展開に着目して－

鳥原　正敏ゼミ

飯島　　大	主体的な制作プロセスにおける学習について　－「歌ってみた」と図画工作を通して－
井上　和哉	図工・美術と思考のプロセスのつながりに関する一考察
甲斐　滉大	子どもの自由な発想を大切にする授業に関する一考察　－図画工作科の活動を通して－
中尾　心春	よりよく生きるためのストレスと発散に関する一考察　－場としての図画工作に注目して－
中武　心花	子どもの感覚特性に基づく合理的配慮に関する一考察　－学校現場におけるものつくりの活動に注目して－
中野　陽梨	思いやりの育成に関する一考察　－図画工作を活かした学級づくり－
萩原　結衣	対話の重要性と授業づくり－図画工作を中心に－
日置　康太	図画工作の活動と総合的な能力の育成に関する一考察

中川　佳子ゼミ

八代　滉太	敏感すぎる特性による影響
國井　陽奈	音楽聴取が学習に与える影響－音楽聴取がもたらす感情と言語能力・非言語能力を用いた学習課題の関連－
久保島大地	大学生における日本語文法理解力について
新發　　優	大学生の一人暮らしが与える心理的影響について－自立・自律性と対人依存欲求及び自尊感情との関連－
西村　綾乃	大学生の一人暮らしが与える心理的影響について－自立・自律性と対人依存欲求及び自尊感情との関連－
星　　知里	音楽聴取が学習に与える影響－音楽聴取がもたらす感情と言語能力・非言語能力を用いた学習課題の関連－
堀　光一郎	サッカーにおける音楽聴取によるパフォーマンスの変化について
右寺　結衣	インターネット依存傾向と共感の関連

西本　勝美ゼミ

池田　伊吹	憲法の理念を生活の中に－主権者教育で 18 歳選挙権を自分ごとに－
石井　琴実	新たな世界と出会う－心を動かす自然体験－
川上　真穂	地域で子どもの育ちを支える－学社連携が生み出す可能性－
金野　有笑	すべての子どもがいきる学び場へ－選択肢としての通常学級のこれから－
佐藤　孝亮	平和を築く担い手となる－悩み続ける力の獲得－
林田　脩己	自立を見据えた自治的な学び－中学校の教科外活動に着目して－
細田　紗希	祭りが子どもを育て、地域を動かす－上本谷獅子組への聴き取りを手がかりとして－

平野　耕一ゼミ

國友惠一朗	野球ボールを投げたときに、ボールが浮き上がるための条件
天海　怜音	都留市における放射線の測定及び比較・考察
小室　朋大	水力発電の現状と手作り発電装置の制作
三枝　有為	植物の色が多様な理由を小学生に伝えるための授業作り
谷　　尚貴	身近な材料を用いて作るモーターを利用した車及び 2 足歩行ロボットの教材化に向けて

廣田　健ゼミ

酒井依千瑠	自己肯定感とコミュニケーション能力を高めるダンス教育
田中　　怜	外国にルーツを持つ児童の居場所づくり　－イスラム教における給食指導の視点から－
別符　舞花	教員養成におけるジェンダー観の現状と課題
洞内　　陸	学びと社会参画　－「学びに向かう力、人間性等」の批判的再構築－
武藏　千咲	国際化に対応する教育施策について－日本文化の再認識・発信と異文化理解に焦点を当てたプロジェクト型学習の検討－
目黒　絵理	地域探求を通した社会参画の力の獲得－福島における地域教材を通じた可能性－
吉池　咲里	子どもの主体性の育成を促す教師の働きかけ－小学校総合的な学習の時間「太鼓 café」の実践の分析を通じて－

古屋　和久ゼミ

小林　　杏　机間巡視における教師の子どもがやる気を無くさない「声掛け」とはー教師の「声掛け」の必要性を知るー
澤　つゆき　教師と児童の「つながり」を深める「生活日記」指導ー教師の標語（「赤ペン」）の有効性ー
新開　彩音　対話的な学びにおける言葉づくりー「アクティブな聴き方」に着目してー
鈴木　威稜　小学５年社会科「自動車をつくる工業」授業実践研究
竹上　悠生　理科の視点を取り入れた俳句・和歌の授業の有効性
棚橋　航希　教室空間における掲示物の必要性ー教室空間を豊かにするためにー
西田　千沙　豊かな対話的学びのためにーグループ編成における【男女混合編成】に着目してー
宮本　麻実　教室空間におけるマンガの活用ー「マンガ大会」の実践に着目してー
山本　真子　通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童への支援方法　ー「学びの共同体」の理論に着目してー

別宮　有紀子ゼミ

今井　雄紀　カナダと日本の理科教育における共通点と相違点
大薗　真由　小笠原諸島父島に生息する亜熱帯植物テリハハマボウ、シャリンバイの根の呼吸速度と葉の蒸散達度、及び道管流速の関係性ー植物の地上部と地下部のまだ見ぬ関係性を解き明かせ！ー
沖埜　慶生　プログラミング教育に有効な理科教材の開発ー生き物の生態を模倣したおもちゃ作り
高橋　尚樹　身近な廃棄物を活用した環境教育教材の提案ーダンボールコンポスターによる生ごみの分解実験ー
直井　勝延　小笠原諸島父島に生息する亜熱帯植物テリハハマボウ、シャリンバイの根の呼吸速度と葉の蒸散達度、及び道管流速の関係性ー植物の地上部と地下部のまだ見ぬ関係性を解き明かせ!ー
西山　昇希　萬葉集の中の生きものたちー梅と櫻に着目した教科横断型授業の提案ー
平田　　舞　ホタルをテーマにした総合的な学習のための教材研究ー山梨に生きるホタルと私たちー

邊見　信ゼミ

宮崎　敬悟　教育支援センター・適応指導教室における不登校生支援の可能性
木村駿太郎　ルールメイキングによる子どもたちの社会参画意識の形成　ー笛吹市春日居小学校へのインタビューを中心にー
市川　柊真　教育技術の法則化におけるほめることの発展性と限界
井上　祐希　満州における日本人郷土教育論　ー満州補充読本を手掛かりにー
今井えり子　「みんなと仲良くする」ことの本当の意味を指導する価値
田中　祐宇　「仲間とつながり合ってハッピーに生きる」学級をつくるには　ー金森俊朗氏の「手紙ノート」実践をてがかりにー
チットウッド　キャンディス　若手教師のメンタルヘルスを支える場づくりー学外における支援の可能性ー
花岡　　岳　学校生活が人格形成に及ぼす影響　ー思春期・反抗期の評価と清算ー
渡邉　和真　自由進度学習における教員の支援に関する検討　ー児童の学習方法に着目してー

水口　潔ゼミ

大貫　　陸　運動指導の観点から考える中国武術要訣「沈肩墜肘」について
神山　　葵　「SLUM DUNK」と「ハイキュー!!」の言語表現に関する研究
清永佳沙妃　スポーツマンガに登場する指導者の言語的表現の変遷ー各年代ごとの指導者像にみる教育的価値の変化ー
中山　天清　小学校保健の教科用図書についての研究ー学習指導要領の内容の変遷に着目してー
清水　友貴　優れた味覚を持つ人たちが感知する苦味成分についての研究
松本　京香　対戦型スポーツにおけるユニフォームの規定に関する文献研究
山口　歩未　学校運動部活動の体罰と指導に関する研究ーバレーボール指導の「未暴力」領域に着目してー
吉井向日葵　バレーボールゲームにおける軟打攻撃の有効性ー攻撃エリア別にみた効果率と決定率ー

武蔵　由佳ゼミ

勝木　晴加　子供のための褒め方・叱り方とは
萱沼　萌香　性の多様性に対する教育のあり方
沢田　嘉乃　不登校予防のための教師の支援
千葉　香穂　不登校児童生徒への居場所支援ーフリースクールの視点からー
松行　夏咲　血液型と性格の関連の有無についての大学生の認知
三留　凪彩　教員不足解消のための要因の検討 ー教育実習についてのアンケートの視点からー
緑川　琴音　子どものウェルビーイングの向上についてー児童期の経験による影響の視点からー
武藤　彩果　通常学級におけるインクルーシブ教育の実践に向けて
若林和代子　自己肯定感の向上に向けた小学校教師の役割と課題

山森　美穂ゼミ

川路　卓味　太陽熱発電に着目した小学校高学年から中学生向けの再生可能エネルギー教材
石田　千晴　炎色反応のスペクトル撮影ができる手作り分光器
釆女　咲希　「栄養素の鉄」と「物質の鉄」に着目した小学校家庭科の授業
小島ゆかり　日本語支援が必要な児童がいる学級における理科の授業づくりー第６学年「水溶液の性質」を例としてー
下田　陸斗　理科の粒子・エネルギー領域への接続を意識した生活科
千葉　理菜　小学校高学年を対象とした食品の抗菌性を教室で観察できる実験
三澤　道盛　蒸留と水蒸気蒸留の実験を組み合わせた中学校第１学年「物質の姿と状態変化」の学習

地域社会学科

国際経済論　佐藤　惣哉ゼミ

今村　駿介	Jリーグの経済効果と今後の展望に関する考察
内海　元太	フィリピンが中所得国の罠から脱するためには
久保島裕輝	経済成長における教育投資の役割に関する考察―日本と東南アジアとの比較―
杉浦　有哉	経済安全保障政策についての考察―日本と海外の比較―
鈴木　惇大	富士宮やきそばの海外進出―東南アジア諸国を対象として―
戸沢　　舜	日本の外国人労働者受け入れ政策の課題と今後の展望についての考察―諸外国と比較して―
松井　翔太	労働市場における労働者の効用度に関する分析―日本とOECD諸国を比較して―
新宮　友成	日本産青果物の輸出の展望

地域経済論　両角　政彦ゼミ

池田　七海	大都市地域における住工共生の社会的意義とその課題―川崎市高津区久地・宇奈根地域を事例に―
市川真由奈	ロケツーリズムによる地域活性化とその継続性―愛知県岡崎市の『どうする家康』を事例に―
川口　夏未	オーバーツーリズムの現状と観光の持続可能性―山梨県富士河口湖町を事例に―
塩澤健之介	昔話を用いた地域活性化の可能性―大月市の桃太郎伝説を事例に―
清谷　萌乃	伝統工芸産業の課題と新たな可能性―「金沢箔」を事例に―
仲亀　莉央	移住促進における空き家の有用性―山梨県甲府市を事例に―
中坂　駿介	離島における経済・社会の持続的発展―長崎県五島市の移住者増加に着目して―
野本　和玖	地方における音楽フェスティバルの地域への影響とあり方―静岡県富士宮市「朝霧JAM」を事例に―
古屋美七海	郡内織物のブランド化
村松　乃愛	空き家活用ビジネスの現状と課題―山梨県南アルプス市を事例に―
若尾　実来	富士山登山が地域社会に与える影響と今後の展望―山梨県富士吉田市を事例に―

農山村再生論　福島　万紀ゼミ

朝日　秀太	地方におけるCCRCの意義と課題
石塚　康祐	自転車を用いた地域活性の現状と可能性
奥原　　駿	地方におけるふるさと納税の可能性と課題
金城　清一	日本のジオツーリズムにおける住民参加の重要性
小林　大晟	道の駅の運営課題の現状と対応策
田中　透心	地域性を活かした商店街の再生
東方　桃子	高齢者による小規模農業の実態と地域農業への影響
水口　力哉	国産材の利用拡大に向けた課題と新たな木材流通の試み
山田　結愛	現代社会における伝統知の利用と継承
吉崎　　彰	アニマルウェルフェアに基づいた飼育の現状と課題

企業経営論　佐脇　英志ゼミ

伊藤　帆南	小規模カフェ長期経営モデルの分析－地域間関係と受け継ぐ価値－
前田　歩人	キャラクターを活用した地域活性化 - ポケモンローカル Acts の可能性 -
正岡　航一	大学生の中小企業インターンシップ参加動機とその効果
井能　侑雅	山梨県における SNS 広告の有効性
片野　湧介	地方都市の地域ブランド戦略について
佐藤　　嵐	アニメへの価値観から見る日本アニメ市場の現状と課題
白井　　颯	SNS 時代における大学生の飲食店舗選択：地方と東京の価値観の比較
徳永　遥香	アパレル産業におけるオムニチャネル戦略の可能性と課題についての研究
長久保理奈	カルフォルニア州にて日本人起業家が抱える地域コミュニティ形成の課題
新津　南美	消費者の CSR 意識と有効なマーケティングについて
細田　明里	教育現場における働き方改革の成果と満足度の分析
矢沢　夢菜	企業版ふるさと納税が地域に与える影響と課題

公共政策論　石垣　千秋ゼミ

天野　蓮	政策がもたらす影響と利害関係の変化－諫早湾干拓事業の例を中心に－
新井沙耶佳	バス事業から見た地域格差と是正への展望－ IoT を利用した公共モビリティ導入への可能性-
小山　修輔	国連軍地位協定と日本－隠れた多国籍安全保障枠組み－
名取　頼希	日本のコメ農家減少には何か起因しているのか～国・地方自治体・利益団体の関係性～
野中陸大馬	若者の政治参加－投票率低下とデジタル化－
法月　陽斗	総務省の政策評価が対象の政策に変化をもたらしているのか
丸岡　杏弥	女性議員と地方議会～なぜ女性議員は増えないのか～
山際　悠太	共生社会の必要性－企業の障がい者雇用に着目して－
横澤　　元	広域行政における迷惑施設立地選定－ごみ処理施設広域化を例に－

自治体経営論　鈴木　健大ゼミ

朝　みなみ　病児保育事業未整備の自治体における病児保育の在り方について
垣尾　遥香　中小企業における知的障害のある社員のインクルージョンの実現
―株式会社栄和産業における障害の特性と業務内容のマッチングを事例に―
河野　夏羽　「開かれた議会」の実現に向けた地方議会のデジタル化の可能性について
～「まちだん」を通じた双方向コミュニケーションの強化と住民の多様なニーズの反映～
田口ひなた　新潟県上越市における訪日外国人観光客増加に向けた発酵ツーリズムの可能性
土屋　龍誠　児童虐待の要因となる産後うつ病疾患者を減少させる施策についての考察
延澤　彩華　災害公営住宅における高齢者の孤立解消に向けた居場所づくりの可能性
細田　夏生　稲作経営の黒字化に向けた可変施肥ツール導入による肥料コスト削減と収量増加の考察
～JA 北新潟（旧 JA にいがた岩船）における可変施肥ツールの事例を通じて～
吉岡　　亨　祭りの担い手を確保するための策について
～「祭ツーリズム」の事例を参考に～
渡辺真日呂　男性限定の場の提供による男性高齢者の社会的孤立解消策について

憲法　樋口　雄人ゼミ

君島　春斗　安倍政権期における憲法改正議論－政治的背景と社会的反応－
和泉川　翼　在日コリアンの参政権問題
岩瀬真由子　インターネット上の誹謗中傷と法的対応－表現の自由とのバランスを求めて－
遠藤　　平　校則と生徒の自由～課題と校則のこれから～
小林　未羽　少年犯罪における加害者支援・被害者支援の現状と考察－少年法の精神”保護”と厳罰化のジレンマ－
近藤　　凜　地方議会における現状と議会改革の必要性
齋藤　慧太　延命治療と医療体制－オランダにおける事例を参考に－
酒井　　駿　賭博罪に関する考察－トレーディングカードゲームオリパという視点から－
佐藤　真優　離婚後の共同親権－「子の利益」のために－
中根　翔子　AI と著作権について考える
中村　文哉　選択的夫婦別氏に関する考察－制度導入をめぐる議論が停滞している要因の検討を中心に－
西脇　空也　アイドルと「恋愛禁止」－その意義と必要性－

国際政治学　峯田　史郎ゼミ

峠田　龍成　ロシアのウクライナ侵攻は不可避であったのか―歴史的背景からウクライナ侵攻を見る―
下村　真也　米中関係の変遷―両国の戦略からみる対立構造―
濱名　悠史　日韓関係における従軍慰安婦問題―1990 年代の主要メディア報道に対するコンストラクティビズムを用いた分析―
大津萌々子　ポスト真実とプロパガンダの変容
橘田　　彩　韓国政権の対日行動の特徴とその要因―盧武鉉、李明博、朴槿恵、文在寅政権を比較して―
倉嶋　丈瑠　武力紛争の阻止と解決に向けた国連改革－「世界政府論」の視座からみる安保理と ICJ の可能性－
関谷　かの　民族的少数派の境遇―平和構築から紐解くユーゴスラヴィア紛争―
高山　玲斗　民主主義国家と正戦論―アメリカのベトナム戦争における兵器の使用を事例に―
中田　雄大　国際情勢の安定化―「覇権による国際秩序形成」の危険性―
淵田　梨花　在日外国人労働者に対する雇用―「多文化共生」に向けた雇用政策を中心に―
吉田　　匠　宇宙開発競争を巡るハード・パワー―アポロ 11 号計画成功までの米ソ間競争―
渡邉　理英　地域機構と安全保障―「アラブの春」を契機とした GCC の変容―
北谷　匠史　戦後日本、80 年目の国防―ドイツ経験を生かして―

環境社会学　神長　唯ゼミ

柏倉　和奏　阿須山中土地有効活用事業にみる「地方創生」―飯能市における地域開発の変遷―
大友　天斗　神奈川県相模原市のリニア開発にみる合意困難性
岡森　風太　首都圏外郭放水路の新たな活用―防災インフラと観光の融合―
木村　帆花　富士山静岡空港にみる地域社会の影響
木本　涼菜　織り女当事者からみる麁服（あらたえ）継承―徳島県吉野川市山川町忌部から大嘗祭へ―
志塚　　蓮　群馬県における足尾鉱毒事件―公害資料館からの学びと継承―
塚田ことみ　観光公害からみる商店街の社会構造―山梨県富士吉田市本町通り商店街を事例に―
福井　乃香　「ダニロン錠」事件からみる薬害防止における労働者保護
的場　智哉　山梨県甲府市における空き家対策のありよう
望月　香里　香害―可視化されにくい化学物質過敏症―

環境法　小島　恵ゼミ

猪股　　葵　化粧品による環境汚染の現状と課題
大北　晃勢　自動車による環境負荷低減のための次世代自動車導入施策
岡崎　美樹　地域活性化につながる再生可能エネルギー導入のあり方
櫻井　春香　山梨県の果樹栽培と地域振興
笹島　修斗　アパレル産業による環境汚染の低減に向けて
辻満友里子　食品ロス対策による循環型社会形成の推進
土屋　季子　地域分散型の再生可能エネルギー普及拡大に向けて
藤　　康貴　日本におけるマングローブの持続的な保全と利用に向けた提言
皆川　陽登　容器包装廃棄物に対するデポジット制度の有効性
山口　早紀　世界遺産の保全に向けた考察－環境問題に焦点を当てて－
渡辺　彩人　「環境汚染が起きた町」の地域再生の取り組み～水俣を中心に～

地域社会論　田中　里美ゼミ

小野寺　泉　高齢者の孤立と地域による支援
笠井　晴奈　生きづらさを抱える児童生徒ー現代社会と不登校―
木下　眞緒　今後の公共図書館に必要な役割とは何か
倉澤　広奈　ペット・ツーリズムの現状と課題―河口湖町のオートキャンプ場を中心に―
貞　　りん　音楽イベントと地域活性化
高山　恭輔　若者のシビックプライド醸成のための教育施策と将来の定住志向に関する考察ー山梨県郡内地方に居住する中高生を対象としてー
中澤　　彩　地域資源を活用したアートが住民にもたらすもの
程原妃奈乃　教育格差についての一考察
前田　晃志　行政によるメタバース利用に関する一考察

都市環境設計論　前田　昭彦ゼミ

錆谷駿之介　コンパクトシティ形成に向けた取り組みについて
岩下　昂誠　無電柱化事業の現状と課題
大倉知里子　明治中期まで新潟県が人口日本一だった理由
坂口　夏野　東京ディズニーランドの都市デザイン的意図について
鈴木　友晴　公開空地の商業利用に関する研究
羽田　大河　富士山噴火で周辺地域に何が起こるのか
茂木　那水　ル・コルビュジエと国立西洋美術館

社会科教育　西尾　理ゼミ

門田健士郎　ニューカマーの生徒が直面する課題の解決に向けた特別な授業の構想～ JSL カリキュラム×社会科の授業の実現に向けて～
桑原　健太　地域を舞台とした探求学習と社会科の連携についての考察
齋藤　優河　高等学校日本史におけるジェンダー視点の導入　―「日本史 B」から「日本史探究」への変化と教科書記述を中心に―
佐野慎之助　戦後初期社会科における学校図書館の活用について―山梨県における図書館教育の事例を中心に―

環境教育　田開　寛太郎ゼミ

伊澤　拓人　飯田市「分権型エネルギー自治」における住民参画の現状と課題
和泉　　碧　持続可能な社会構築における新奇食品の可能性～代替タンパク質市場の拡大に向けた一考察～
遠藤みのり　インバウンド対策におけるコミュニティを基盤とした観光まちづくり - 山梨県南都留郡富士河口湖町河口湖地区を事例に -
小原　悠歩　林業における若者の就労拡大に関わる森林環境教育の役割と課題
柴田　　陸　副読本を用いたジオパーク教育の可能性と課題～島原半島ジオパークを事例に～
中村　　操　Significant Life Experiences が環境意識と環境配慮行動に与える影響 - 山梨県東部地域で環境保全型農業に取り組む農業者を対象に
廣野　珠梨　ESD とキャリア形成に関する一考察～総合的な探究の時間における体験学習の意義～
深澤　響子　子育てにおける人形劇ワークショップの役割と可能性
藤田　実代　完食指導が招く問題と給食指導のあり方に関する考察―西桂町西桂小学校と都留市立宝小学校を事例に―
真島　優葉　新倉富士浅間神社における観光公害対策の現状と課題
米川　愛実　長野県下高井郡山ノ内町における環境保全の再考 - 山ノ内町の社会教育過程の批判的検討 -

生涯学習論　冨永　貴公・秦　範子ゼミ

雨宮　璃空　文化財保護の観点から博物館の活用に関する一考察　ー博物館法改正に着目してー
泉　　崇斗　将来像が自身の成長や進路に与える影響
ー社会人を対象にしたオンライン調査分析に基づいてー
魚住　蒼太　プロジェクトアドベンチャーにおける「アクティビティ」の意義
ーみやぎアドベンチャープログラムを事例にー
内山　叶子　現代における公立夜間中学の在り方
ー京都市立洛友中学校の事例に着目してー
大口　悠稀　障がい者への固定概念を無くすためには
ー国立市公民館「喫茶わいがや」を事例にー
北嶋　夏帆　ヤングケアラーの発見と自覚を促すための支援策と教育の可能性
ー山梨県の学生及び担当職員を対象にした調査分析からー
古賀　聖菜　戦後教育における防災教育の変遷
～中学校学習指導要領の分析を用いて～
小西　海里　若者間の DV における音楽の影響
ーインディーズバンドの楽曲に着目してー
鈴木弥真斗　体罰の社会文化史
ー体罰の教育的意義はなぜ失われたのかー
高橋　　諒　日本におけるユースクリニックの実践
～子ども・若者が安心して相談できる場所を作るためにできることは何か？～
若山　拓真　不登校児童生徒の「多様な学びの場」に求められることは何か
ー「イエナプラン教育」に着目してー

地域史　鈴木　哲雄ゼミ

阿部　　航　今川政権下における村山修験の展開
入澤　友樹　キリスト教布教の鍵となった茶の湯―戦国時代におけるイエズス会の適応主義―
佐藤　雄飛　天正期南奥地域における「惣無事」と「惣和」―中世の地域統合の到達点として―
佐藤　里菜　郡内小山田氏と富士山御師―経済と軍事の二面性から―
瀧澤　里緒　富士川舟運と鰍沢
濵田　真尋　城久遺跡群と「おもろさうし」からみるキカイガシマ―琉球とヤマトの交易拠点としての働き―
福山　享太　道北・道東おける鉄道の開通―拓殖鉄道と近代化ー
宮下　　綾　江戸時代における肉食および犬食文化―「生類憐みの令」に着目して―
若島　　壮　「商人の巻物」の儀礼・作法と修験山伏
窪田　智章　蒙古襲来期の対馬―蒙古・高麗との接触―

比較文化学科

伊香　俊哉ゼミ

増山日和子	近代日本の幼児教育―1930 年代の戦争との関わりを中心に
神澤　未来	第二次世界大戦中の女性の動員―日、独、英、米、ソを中心に
岸　菜々花	戦前期ジャーナリストの言論比較―清沢洌と徳富蘇峰
坂本　琴嶺	戦時下の映画政策と製作の実態―日本、満映、東アジア、ドイツ、アメリカの事例から
高橋　夏未	植民地支配の記憶を継承する意義―「群馬の森」朝鮮人労働者追悼碑撤去問題を事例として―
外内　琳子	戦時期日本の音楽事情―“うた”の役割と音楽の位置づけ
穂藤　伶音	「少国民」の思想形成についての一考察―検閲と錬成の影響を中心に
渡邊　咲來	ホロコースト下の収容所の実態―衣食住、選別・労働、精神状態を中心に

青木　深ゼミ

磯野　葉月	日本における米・韓・日の映画ポスターのデザインに関する比較研究 2014-2023
大島　百夏	地域性メディア戦略――首都圏と岩手県における CM 広告表現の比較研究
加藤　　優	現代日本に見られるルッキズムー―身体加工に関わる広告を事例として
坂口ゆり子	アニメを用いた地域振興――『ゾンビランドサガ』を事例に
坂本優里香	「浜松国際ピアノコンクール」研究――地域住民・出場者・審査員・作曲家・調律師に注目して
塩野　新菜	現代における花魁表象――「おいらん道中」・「花魁体験」から考える
橘　　裕希	サザンオールスターズとバブル期日本――映画『稲村ジェーン』から考える
長谷川華音	女性落語家の道――伝統の中の苦悩と挑戦
浜田　小春	ミュージカル『テニスの王子様』の「推し方」――アニメ・マンガ・ゲームのファン行動と比較して
福士　芽依	宮沢賢治における岩手の森と人との関係
宮崎　明音	『銀河鉄道の夜』研究――宮沢賢治による原作小説と「青年団」による演劇作品との比較
円子　智希	漫画海賊版サイトの「罪」――多様化する権利侵害とその対策

山本　芳美ゼミ

青松　笑子	沖縄県読谷村における郷土資料の成立背景と意義
谷藤　爾来	伝統野菜の生産における地域性の保持―山梨県の長禅寺菜を事例として
小田嶋朱音	B 級グルメブーム後の地域ブランド力維持に関する考察ー秋田県横手市の事例から
倉林みのり	中央アジア・トルクメン装身具トゥマルの造形についての一考察―三角の形状に着目して
Wu Yichen	中国浙江省湖州市「做十六歳」の近年の変化及び原因の分析
齊藤　聖菜	代用食と戦争の記憶―岩手県北上市の「ひっつみ」を事例として
齊藤　　翠	コロナ禍の食に関する流言の発生及び拡散をめぐる考察―X の調査に基づいて
柴田　　雄	80 年代以降のリクルートファッションから見る男子学生の「自由と規制」の考察
杉森　祐希	水害・土砂災害対策における行政―住民間のリスク認識の比較―富山市八尾地域における事例研究
寺本　晃治	ニューポートジャズフェスティバルから派生した戦後日本におけるジャズフェスティバルの検討
中島　　遥	『ＪＪ』にみる女性の人生観の変化とその社会的背景の考察
中野　遥月	「赤＝女性」という表象の考察ー 1964 年の東京オリンピックにおけるピクトグラムに着目して

邊　英浩ゼミ

KIM JI HO	韓国のチャイナタウンで見る中国人ニューカマーコミュニティの特徴
作田明香里	音楽番組における日韓協力の登場
芝田　暖乃	化粧と整形の境界線
高橋りんな	現代韓国・日本のルッキズム
高松　　奏	日本における韓流ブームの展開
田端彩珠佳	日韓フェミニズムの歴史と現状
東宮　由佳	韓国と日本の合唱文化
中沢　美尋	「アイドル」とは何か
松枝　花音	美しさと五感
村澤　　琳	韓国ドラマ・映画と日本

水野　光朗ゼミ

藤川　康平	An Inquiry into the Good: The Case of Nishida Kitaro
森澤りょう	なぜ音楽は人々から必要とされるのか
安間　祥幸	和歌山県の捕鯨産業について
山口　真鈴	新型コロナウイルス感染症の流行によるマスクとメイクの変化について

内山　史子ゼミ

白浜　侑莉	「多民族国家マレーシアの宗教と生活」
田中知花代	「シンガポールにおける少子化政策と人口政策について」
伊藤　紗希	「インドネシアの環境問題―大衆の環境問題に対する意識の醸成は成功したのか―」
木下　　悠	「インドネシアにおける宗教制度と宗教的マイノリティ」
田中　愛海	「タイにおけるゾウの観光と保護について」
廣瀬　圭梧	「東南アジアにおける海洋プラスチックごみ問題―具体的な施策から見る効果的な解決策について―」

LEONG POOI YENG　「The Influence of the Bumiputera Policy on the University Choice of Malaysian Chinese Students」
綿貫　望　「タイのピー信仰について」
石田奈々子　「仏塔にみられみられる東南アジア仏教の宗教観」

野村　佳世ゼミ

堤　理葉　技能実習制度の在り方－韓国の雇用許可制を参考に－
磯崎　萌花　2016年アメリカ大統領選挙で、なぜトランプは選ばれたのか
伊禮　寛貴　開発途上国における持続可能な枠組みの分析－失敗から考えるアプローチ－
小川　真佳　教育から考える日本の多文化共生実現に向けた取り組み－横浜市の事例から－
窪田　夕映　スペインにおける地方言語の言語的威信の構築と回復－ガリシア自治州におけるガリシア語復興運動を事例に－
後藤　涼那　警察官による黒人への暴力行為はなぜ起きるのか－アメリカ史からみる正当化－
白川みふゆ　社会心理学的観点からみる日本人の外国人嫌悪－嫌韓意識に焦点をあてて－
多々良圭祥　スポーツにおける性的多様性の受容－トランスジェンダー・インターセックス選手の参加をめぐる考察－
羽吹　天音　日本におけるホワイト・ネイションの歴史性－幻想を抱かせ、維持・再生産する白人性－
樋口　葉音　技能実習生を受け入れるための日本語教育
真家　凛花　技能実習制度の本来在るべき姿とは
矢崎百合子　難民とともに暮らす社会の実現に向けて－ドイツのインクルーシブな言語教育を参考に－

上野　貴彦ゼミ

須江あかり　日本語教育を解きほぐす～支援者の語りに注目して～
古戸　広大　日本人ワーキングホリデーの現状―シドニーを例として―
加賀美悠大　学問のジェンダー問題：試験制度に注目して
國代　亜湖　国旗に映る脱植民地化――歴史とアイデンティティの象徴闘争
齋藤　友萌　韓国創作ミュージカルとナショナリズムの関係性―安重根と海外養子縁組を中心に―
佐々木優花　東北地方における外国人支援体制――教育機会の偏りがもたらす課題と支援体制の可能性
佐藤　鈴子　新宿における「日本人」の語りをめぐる試論的考察
谷　朱理　日本における言語と国民性をめぐる言説について
土田　遥　幸福を輸入する―北欧の休み方・働き方言説の日本における広がり―
藤井　晴　メディアからみる日本のフラ受容

山越　英嗣ゼミ

坂本　京子　地がらしをめぐるフードスケープ論――福井の「麩市の地がらし」の事例から食が持つ物語性と景観について考える
千葉　優衣　神楽の「舞い手」と「観客」の相互作用――岩手県花巻市大迫町早池峰大償神楽を事例として
石田　百花　道の駅が果たす地域福祉の役割――山梨県の高齢者支援の実態調査
生藤　舞　阿波藍における伝統の変容と継承――徳島県藍住町の事例から
阿部　華稀　「横手の送り盆まつり」における伝統文化の継承
齋藤ちひろ　災害とツーリズム――福島県におけるホープツーリズムを事例に
佐々木諒大　日本のヒップホップにおけるジェンダー意識の変遷
熊谷花菜海　なぜ「恩送り」をするのか――「お互いさまの街ふくしま」を事例に
沼尻　菜央　若者における伝統的工芸品の継承の意義――三重の伊賀組紐を事例に
仙崎まりあ　物語における母娘関係――母からの自立と創作による自己心理療法的な側面から物語の意義を考える
山添　綾子　フェスと人びと――京都大作戦を事例に
大澤　智奈　日本社会のジビエ普及と狩猟文化の継承

齊藤　みどりゼミ

大川　明　肉食主義から差別問題を考える――あらゆる抑圧からの解放とは何か――
大西　芽依　チョコレートと社会問題――『チョコレート工場の秘密』とその映画作品を中心に――
岡本　践　The Assessment of Muscle Dysmorphia Seen in Body Builders ボディビルダーに見られる筋肉醜形障害に関する考察
岸　風花　ジェンダーステレオタイプの変遷――グリム童話からディズニー作品まで――
木村　理人　芸と芸術の全う――フランツ・カフカ『断食芸人』論――
粉川　友希　ディストピア小説におけるユートピアへのまなざし――オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』を巡って――
齋藤　琴美　変容する『フランケンシュタイン』――虚構から創作へ――
阪井めるも　『若草物語』に見るルイーザ・メイ・オルコットの「幸福」観
冨永　歩美　『さんかく』における関係性――食と女性性の表象――
千葉　優羽　ファム・ファタールとしてのジプシー像――ユゴー著『ノートル＝ダム・ド・パリ』を題材に――
松下　里帆　『十二国記』におけるアダプテーション研究――原作とアニメオリジナル――
Ling Mengyi　アリス・ウォーカーの『カラー・パープル』から見る黒人女性――小説と映画の比較を通じて――
山崎　舞衣　K-POP歌詞と日本語版歌詞における日韓役割語比較　――人称代名詞と文末表現を中心に――

佐藤　裕ゼミ

真鍋　優花　南アフリカにおけるセックスワーカーのつながり――人種・階級・ジェンダーをこえた組織化に向けて

大竹あやめ　日本におけるヴィーガニズム普及活動をめぐる困難――動物解放団体リブを事例として

佐川颯一朗　ヒンドゥースターニー音楽の力――ネパールの古典音楽学校における属性をこえたつながりの創造

高野　琴子　バングラデシュの縫製産業における労働環境――ラナ・プラザ崩壊後の企業主導型支援の可能性と限界

長井　琢武　ガストアルバイターから定住者へ――ベルリンのトルコ人集住地区を例に

松下みやび　外部者の介入によるカンボジア農村の変容――トロペアントム村の開発実践から

尾崎　涼介　高齢者の孤独死予防における地域コミュニティとNPOの役割――震災復興後の神戸市を事例に

梶　　誠実　Dispossession of Entitlement among Project-Affected Persons and Bureaucratic Power: The Social Process of the San Roque Dam Construction in the Philippines

川﨑野乃花　3.11後の生活再建にみるケア実践と母性――新潟市における母子避難者の語りから

谷　　輝星　月経衛生対処の開発支援と私企業のかかわり――ミャンマーにおける生理用ナプキン普及促進事業を例に

羽上華乃子　双極性障害とともに生きるものたちの声――ナラティブからみる社会と個人の相互関係

堀　ひな子　南アルプス南部の山岳観光事業と中山間地域の「活性化」――企業とNPOによる取り組みの比較から

前田のの香　「平和都市」広島の戦後復興――原爆スラムにみる開発の恣意性

味上　　凛　政治的影響力に翻弄される文化コンテンツ――K-POPアイドルを事例に

LAN Ruizi（兰睿姿）　日本の「国際化」と中等教育における単位互換の陥穽――中国からの編入生の事例

岸　清香ゼミ

入江　大志　電話機の利用とコミュニケーション―LINEの既読無視に関する返信作法から見る道具的使用への移行―

新井　温喜　摂食障害と向き合う私たち―「理想的身体」を発信し続けるメディアとその使い方―

岡部　凜音　文化施設と市民の育成―水戸芸術館現代美術センター「高校生ウィーク」が承認する〈自分らしい〉生き方―

金子　百音　麻雀のスポーツ産業化―競技者とファンがつくる推し活―

北向　優衣　地域にいきる部活動―富士山河口湖音楽祭・中学生特別バンドが拓く楽しむ音楽―

見上　　響　映画における戦争記憶の表象可能性および不可能性―クリス・マルケル『レベル5』(1997)による沖縄戦の再照射―

宮腰　真優　学校における美術鑑賞―京都芸術大学「対話型授業プログラム」が目指すコミュニケーションと作品理解の深化―

菊池　信輝ゼミ

岡田　悠季　日本において結婚とは何か―同性婚をめぐって―

清水　方善　戦後日本における消費税

武田　真佳　生活保護に対する偏見とメディアの役割

永山　稜泰　岸田政権における社会保障改革の陥穽

船木　怜莉　多文化共生と日本語教育―日本における日本語教師の不足問題を中心に―

溝口　誠紘　新自由主義下での農業経営―中小農家の困難と政策支援の可能性―

最上　　凛　現代日本における体験格差の実態

山田　萌香　少子化対策を男女共同参画の視点で考える

劉　　香宇　新自由主義とは何か

渡辺　裕月　地方銀行の今後

国際教育学科

青山　郁子ゼミ

相澤　　萌　留学経験が学生の自己成長感に与える影響 ーパーソナリティ特性との関連性に着目してー
小川　涼加　児童の論理的思考力形成と家族機能の関連性 ー具体的操作期から形式的操作期への移行過程の探求ー
加賀谷ちづる　世界のいじめ予防教育の日本への応用可能性 ーフィンランドとノルウェーに着目してー
塚島　琉花　中学生による教師認知が本来感に与える影響 ー学級風土を媒介要因としてー
花村　ひな　本来感と心理的 well-being に関連する高校生の活動（学校生活・部活動・対人関係）ー学校満足度・コーピング・自尊感情を媒介してー
廣瀬　香乃　家族関係は経済的豊かさを超えて主観的幸福度に寄与するか ー日本とフィリピンの比較研究ー

木下　慎ゼミ

小林　加奈　自己肯定とはなにか ー自己受容と成長欲求に注目してー
佐々木悠衣　心と身体は切り離せるのか ー心身二元論とその批判に注目してー
佐藤　瑠佳　集団の中で自分らしく生きるということ
中丸　　暖　孤独とどう生きるか：エヴァンゲリオンに見る人間の選択
村田　倫子　ひとはなぜ装うのか ファッションから始まるコミュニケーションの可能性について

佐々木　南実ゼミ

小池ひなつ　学びのユニバーサルデザインを援用した PYP のユニットプランの検討
阿部　泰豪　「日本におけるグローバル人材育成の変遷」～国際バカロレアプログラムの導入を中心に～
角田万里愛　海外教育における「日本式教育」の役割
葛西　朱桃　「求める教師像」に関する研究
流郷　レイ　逆向き設計を利用した高校歴史科の授業開発

Nordström, Karl Johan・入倉　友紀ゼミ

田原　育実　日本の食品ロス問題の現状とこれからの展望 ～フランス・アメリカ・韓国との比較を通して～
阿部　美優　映画『ボーンズ・アンド・オール』におけるアイデンティティの探求
小沢　芽唯　大人の対話型鑑賞 ーその効果と活用に関する研究ー

原　和久ゼミ

荻田　藍奈　道徳の授業におけるアニメーションの活用 ー「聲の形」の教材化をめざしてー
遅澤　瑞貴　日本とスウェーデンにおける国際バカロレア教育の比較研究 ー中高生の学習意欲と進学に対する意識に着目してー

藤井　翔太ゼミ

佐々木夕空　生きがいとは何か
麻生　修司　ケアの倫理は女性のものか ーキャロル・ギリガン『もうひとつの声で』の解釈をめぐる論争再訪ー
関根　風太　P4C（子どものための哲学）の教育効果
金田　優歩　教育における認識的不正義
岸本　あこ　日本の中等教育における学校制服の多様性
木村　夏凜　社会的自己の複数性について
中佐古そら　子どものための哲学対話におけるファシリテーションについて
百瀬　将悟　人生の意味における超自然主義と自然主義
山崎　伶弥　中等教育における合理的配慮の提供とその射程

前島　礼子ゼミ

片山　美涼　1937 年の『カレワラ』の日本語訳出版とその背景 ーフィンランドの外交戦略の影響ー
澤近眞也子　中学社会科における主権者意識の育成：模擬選挙の実践を通して
高瀬佑之介　「奥州幕府構想」をめぐる議論の展開
仲原　真帆　タトゥーに対する日本社会のイメージ ータトゥー施術動画のコメント欄を手がかりにー
西山　輝美　食品ロス削減推進法の成果 ーフランスの食品廃棄規制法との比較ー
前田　一葉　VTuber 視聴者にとって「中の人」はどの程度魅力となっているのだろうか。

茂木　秀昭ゼミ

浅川　瑛子　助け合いができる人を育成するために、小学校教育ができることは何か
石橋　朋枝　演劇教育を取り入れた英語教育の効果と課題

大学院文学研究科

○国文学専攻

指導教員　加藤　敦子

藤田竜太朗　　鶴屋南北作品における「累物」

指導教員　吉田　恵理

上田あいり　　谷川俊太郎の「詩劇」――ラジオドラマにみる「詩」と「劇」の葛藤

松澤　海飛　　窪田空穂の「調子」――震災･戦争詠から「捕虜の死」へ

赤松　優香　　近代におけるスサノヲの受容と生成―芥川龍之介・武者小路実篤・北原白秋―

指導教員　野中　潤

有馬　遼稀　　国語科教育におけるサブカルチャー観―教科の「見方・考え方」を軸に―

○社会学地域社会研究専攻

指導教員　西尾　理

吉澤　知倫　　高校入試問題を活用した中学校社会科授業改善の正当性に関する考察
――教育指導時報を主要資料とした長野県高校入試問題分析を通して――

指導教員　冨永　貴公・池谷　美衣子

HE JIAXIN　　中国都市部で働く高学歴若年女性の職業キャリアと結婚――その葛藤と対処に関するインタビュー調査から――

○英語英米文学専攻

指導教員　儀部　直樹

弓野　敏滉　　Hemingway's Perspective of Gender

○比較文化専攻

指導教員　山本　芳美

村松由香子　　外国につながる子どもに対する進学支援の現状と課題－静岡県焼津市の事例を中心に－

○臨床教育実践学専攻

指導教員　佐藤　隆

高橋　志緒　　「学びとケアをつなぐ」教育実践の可能性―ケアの必要性を問い直す視点から考える教師の専門性―

指導教員　廣田　健

藤田　元樹　　教材選定における教員の役割と教育行政に対する一考察 － 教員の専門性に基づく観点からの分析

指導教員　武蔵　由佳

大橋　真唯　　図画工作科におけるピア・フィードバックが児童の自己効力感と意欲に及ぼす影響

都留文科大学英文学会・加藤めぐみゼミ共催
国境を越えて
－文学のその先にあるもの

開　催：7月9日(水)
講演者：Joshua Rogers 氏

日本が敗戦し民主主義国家に生まれ変わってからおよそ 80 年。 国際情勢を鑑みると、この国も再び戦場になるのではないかという懸念は拭えない。そんな 2024 年春、加藤めぐみ教授と Joshua Rogers 教授（ニューヨーク市立大学クイーンズ校）が立ち上げたのが、ICT を用いて日米の学生を繋ぎ、協同学習を通して問題解決に取り組む COIL（Collaborate Online International Learning）プロジェクトである。学生たちはグループを作り、日米双方の視点で制作された戦争映画を通して戦争と平和について考えをまとめ、発表を行なった。罪のない人々が国に翻弄され、人間としての尊厳や生活基盤を失い、深い孤独や悲しみ、苦痛に苛まれ追い詰められていく。本来の彼らの人間性が戦争によって崩壊していく様を描いたそれらの作品から、正義同士の争いである戦争は何も生み出さないということを私たちは痛感した。（青木）

そして 7 月 9 日、Joshua 教授が来日し本学を訪問された際の特別講演では、文学の持つ 3 つの力についてお話をいただいた。その 3 つとは、文学は私たちのあらゆる「境界」を越える助けになること、また私たちをいかようにも「分断」し、一方で連帯への「力を与える」こと、そして文化や社会、歴史理解への一助となることである。教授の生い立ちと、日本文学に自身が救われた経験について聞いているとき、それぞれ違う境遇に育った学生たちの多くが頷き、共感を示していた。文学について語るいまこの場に、まさにその力が表れているように感じた。COIL で第二次世界大戦を様々な側面から考察したことも踏まえ、戦争がただの教科書の内容とは言えなくなってきた今日、私たちが文学を学ぶ理由はなんだろうか。文学に触れることで得たもの、手放したもの、そしてこれから出会うものを見過ごしてしまわないよう、文学と地続きのこの日常を見据えていきたい。（内谷）

（英文学科 4 年　青木聖奈・内谷桃花）

講師紹介

Joshua Rogers 教授

東京大学で学位を取得したのち、コロンビア大学大学院で日本文学の博士号を取得。
2021 年から現在においてはニューヨーク市立大学クイーンズ校にて日本文学と映画を教えるかたわら、20 世紀初頭の科学と宗教が日本の文学、哲学、政治にどのような影響を及ぼしたかを研究している。

多和田葉子＆満谷マーガレット×都留文科大学英文学会
翻訳の呼吸『犬婿入り』*The Bridegroom Was a Dog* を読む

開　催：10月25日(金)　　講演者：多和田　葉子 氏・満谷　マーガレット 氏

2024 年 10 月 25 日に詩人、小説家として活躍している多和田葉子先生と翻訳者の満谷マーガレット先生をお招きし、多和田先生の芥川賞受賞作である『犬婿入り』についての翻訳ワークショップを行った。開始まで作品の舞台と考えられる国立市についての動画をみて、物語への想像を深めた。その後、中地先生から講師紹介があり、お二方から作品への想いやこれまでのご活躍についてお話しいただき､「英訳を考える」のコーナーへと移った。

このコーナーでは 5 人の学生が『犬婿入り』の中からそれぞれ好きな箇所の英訳を考え、満谷先生の英訳やAI の英訳と比較しながら、その考察とともに自分の英訳を発表した。英文学科1年の中西結香さんが、「雨の糸を照らす」「ハッと気づく」など日本語特有の表現を英訳することに難しさを感じたと述べると、満谷先生は、主観的な状況を客観的に英語で表現することで日本語特有の表現を訳すことができると回答された。また英文学科1年の森輝さんの受け身形を用いた英訳に、日本語は感情や内面的な体験を強調しやすい言語だが、英語は強調しにくい言語であり、例えば「私はいじめられた」という訳は “I am bullied” よりも “Everyone bullies me” の方が自然な英語になるとおっしゃった。このように、翻訳の質を高めるアドバイスをいただいた。

英文学科2年の江口奈緒美さんは、作品の中で主人公に子どもたちが「何歳か」という質問を何度も繰り返していたということを強調するために過去形ではなく現在形を用いるという工夫をした。だが、英語においては一文の中の時制を揃えることが鉄則であり、現在形の中に過去形を混ぜても日本語のように強調の役割を果たさないことが説明された。英文学科 2 年の勝谷勇士さんは、上司に対して “Thank you” や “You” を使うのは失礼であると感じ、自身の訳では “I appreciate~” と代用した。しかし、アメリカ人は物事を感情を直接的に言う文化があるため、英語圏では失礼に当たらないらしい。英文学科 3 年の小野寺駿さんは、「～逃げるように」に対して “run away” を用いた。ここで、満谷先生は “run away” と “get away” の違いについて解説され、“run away” を使うとすぐにその場から逃げたというニュアンスにならず、“escape” と近いが、“get away” を用いることで、その場から真っ先に逃げたい臨場感のある表現ができるとおっしゃった。

最後に、多和田先生と満谷先生の質疑応答、対談の時間になり、ドイツ、日本、アメリカそれぞれの国の間で比べるとアメリカの校閲が厳しいことや本の出版における「編集者」という第3者目線の大切さについてお話をされた。今回の講演会では、翻訳力を向上させるための知識だけでなく、翻訳の背後にある文化的なニュアンスについての知識も得ることができた。また、実際の翻訳のプロセスについても触れてくださったので具体的でわかりやすいものになった。この講演会を通して、参加者は翻訳の世界について益々興味を覚えるようになったと思われる。

（英文学科１年　西田小春）

講師紹介

多和田　葉子（ たわだ　ようこ ）

東京都生まれ。小説家・詩人。本学英文学科特任教授。早稲田大学第一文学部を卒業し、ドイツに渡る。チューリッヒ大学博士課程修了（博士号）。大学を卒業後、およそ 40 年にわたってドイツで暮らしている多和田先生は、日本語とドイツ語の2つの言語で小説の執筆を行っており、作品は 10 を超える言語に翻訳されている。数々の文学賞を受賞し、国際的にも高く評価され、2016 年にはドイツで最も権威のある文学賞のひとつ「クライスト賞」を受賞している。2020 年には紫綬褒章を授与された。

満谷　マーガレット
（ みつたに　マーガレット ）

アメリカ・ペンシルヴァニア州出身。日本文学研究者、翻訳家。ウースター大学卒。東京大学大学院博士課程修了。多和田葉子氏や大江健三郎氏の作品の翻訳を多数手がける。『献灯使』の翻訳 *The Emissary* が 2018 年アメリカで最も権威のある文学賞である全米図書賞（翻訳書部門）を受賞した。

都留文科大学比較文化学科・比較文化学会主催講演会
映画を通じて社会とつながる

開　催：10月23日(水)　　講演者：渡邉　一孝 氏

弊学比較文化学会では、昨年度から技能実習生をテーマとした講演会を開催してきた。今回はその一環として、技能実習生を題材とした映画『海辺の彼女たち』の上映会と、同映画のプロデューサーである渡邉一孝氏による講演会を実施した。講演会では、『海辺の彼女たち』の製作裏も踏まえつつ、映画の成り立ちや、映画の役割などについてお話をいただいた。

講演ではまず、映画の一生について語られた。企画開発から始まり、製作、上映、そして最終的な消滅までの過程が説明された。この過程は人生に例えられ、作品を持ち続ける責任と意義が強調された。

続いて、インディペンデント映画と商業映画の違いについて触れられた。渡邉氏によれば、インディペンデント映画とは、誰にも依頼されていない自発的な映画であり、商業映画とは、マーケットの論理に基づく映画であるという。これらの関係性は対立するものではなく、しばしば両立しうるものであるという。渡邉氏自身は、この関係性の中で企画の出発点を市場ではなく自発性に置き、現実世界で起こりうる物語を題材とした「社会に近い映画」の制作を心がけてきたという。

自身の作品『海辺の彼女たち』については、ミャンマー人技能実習生の SOS への無力感が制作の契機となったことが明かされた。この作品は、既存のメディアでは伝えにくい世界や心情を描いた点や、2020 年頃の社会を「ピン留め」（記録・保存）した点などに意義があったのでないかと述べられた。加えて、映画館は異なる立場や人種の人々が集う場となり、彼らのフィードバックから、立場が違えども皆似たような感想を持っていたという現実が浮き彫りになったとも述べられた。

講演の締めくくりでは、映画製作は現在の責任だけでなく、将来の責任も担うものだと述べられた。また、若い世代へのメッセージとして、「世界の複雑性に寄り掛かること」の重要性を説き、予想を裏切られる経験の積み重ねが新たな視界を開くと語った。

（比較文化学科2年　田中拓実）

講師紹介

渡邉　一孝（わたなべ　かずたか）

配給会社、俳優事務所、映画祭のスタッフを経て、日英翻訳のコーディネートや字幕制作、自主映画の制作を行う。2014 年に映画の企画から配給・セールス及び翻訳字幕制作を行う株式会社 E.x.N(エクスン) を設立。山形国際ドキュメンタリー映画祭ラフカット部門プログラムコーディネーター。映像を観て対話する「見たことないモノを観てみる会」主宰。

国際教育学会主催講演会
「How do you live better in a diverse and multicultural society as a global citizen?」
国際教育学　講演会レポート

開　催：1月16日(木)　　講演者：岡本　啓史 氏

2024 年 1 月 16 日国際教育学会主催の講演会に岡本啓史先生をお招きし、国連や国際 NGO などで 45 か国以上の教育支援に関わった経験から「国際教育とはなにか」についてお話を伺った。比較教育と教育開発の違いや具体的な国際教育の仕事についてご自身の様々な経験を語っていただきました。特に、NICEF、JICA、NGO での活動の経験から、認知能力だけではなく、コミュニケーション力やレジリエンスなどの非認知能力を育てることについての重要性を強調されていた。中でもモザンビークの学校での体を使ったあいさつのワークは教育の現場での実践例として興味深く、学生も楽しみながら一緒にチャレンジすることで一気に場が和みました。

また岡本先生のライフヒストリーを中心に、進路を自分で見つけ、選び取る力の重要性について語られました。自分のやりたいことを明確にするための考え方のコツや、My5W1H のフレームワークを活用する方法についても具体的なアドバイスがありました。特に「なりたい自分から逆算してアプローチする」という考え方は、参加学生にとって大いに参考になるものでした。

さらに IB　Philosophy の一つである「Life-long learner」の考えについても、日本がアジアで一番大人が学んでいない国である現状を踏まえ、学び続けることの重要性が強調されました。迷ったら、10 秒ルールでとりあえずやってみることが推奨され、受講生の行動を促し背中を押すものでした。

今回の講演会は、実践的な内容が盛りだくさんのものであったが小規模な集まりであったため、講師の先生との距離が近く感じられ、アットホームな雰囲気の中で進行した。実際に参加者からの質問が多く飛び交い、とても学びの多い有意義な時間を過ごすことができた。参加学生は皆、今後の学業やキャリア形成において大いに役立つ多くの知見を得ることができたと思います。

今後も国際教育学科では、多様な教育に関する講演やイベントを企画していく予定です。ご期待ください。

（国際教育学科教授　青山郁子）

講師紹介

岡本　啓史

神戸大学を卒業後、海外に出る。これまで世界 5 大陸に住み、世界の子どもに学びと笑顔と可能性を届けることを目指し、国連や国際 NGO などで 45 か国以上の教育支援を実施。フリースタイルダンサー、役者、ミシュラン星付きレストラン料理人としての経歴ももつ。ニューヨーク大学大学院修了（国際教育学）。5 つの言語でブログを書き、あらゆる学習とライフスキルに関する情報を発信（ https://mdhiro.com/about/?lang=ja）。

ジェンダー研究プログラム運営委員会主催
カマラ・ハリスをめぐる言説から見える アメリカと世界の現在と過去

開　催：11月20日(水)　　講演者：松本　悠子 氏

本講演「カマラ・ハリスを読む」では、2024 年のアメリカ大統領選挙に出馬したカマラ・ハリスの出自をめぐり、選挙期間に交わされた数々のジェンダーと人種に関する言説に注目した多角的な解説があり、アメリカでの現象にとどまらない人種とジェンダーの交差の歴史を考え直す有意義な時間となった。

講演ではまず、ハリスが D.E.I. 候補 (“Diversity, Equity, Inclusion” の略称) とみなされていたことに触れ、D.E.I. 運動の今日までの歴史と反 D.E.I. のレトリックなどについて詳しい解説がなされた。さらに選挙期間中にハリス自身に対する言説の中でキーワードとなった「キャット・レディ」や「ガラスの天井」について言及があり、特に「ガラスの天井」という言葉については 2016 年の大統領選と比較した。アメリカだけでなく、日本でアメリカ大統領選を「ガラスの天井」を用いて報じる際、いかにステレオタイプのイメージが使われたかについても説明があった。またハリスが選挙運動中特に人工妊娠中絶に対して熱を持って言及・政策提案を掲げたことに注目し、人工妊娠中絶というトピックを政治化することの多面性、ハリスの選挙方針の限界点を考察した。

女性大統領選出は女性票の獲得にかかっていたが、依然として保守派の女性は堅く、男性票が少ないことも作用して今回の結果に至った。また選挙に際し、ハリスは自らを黒人として宣伝した。元大統領のバラク・オバマも黒人の個性を前面に出して大統領選に臨んだので、彼女もまた、戦略として黒人の立場をとったと見られる。しかし黒人も一丸とならない理由として、黒人男性からの支持に歴史的な観点から注目した。人種差別が公然と行われていた時代、イニシアチブをとったのは黒人女性だった。彼女たちは男性同様に肉体労働を強いられるほか、乳母や家政婦としても活躍した。しかし公民権運動後、女性優位への黒人男性の不満は表面化され、トランプ陣営はこれを巧みに利用した。

2024 年のアメリカ大統領選は、存在の政治の重要性を浮き彫りにした。この講演は、多様性とは何か、多様性規範批判の問題点は何かを考える機会になった。

国際教育学科講師　前島礼子
国際教育学科 3 年　佐藤美桜
鈴木陽佳

講師紹介

松本　悠子

講師の松本悠子先生は中央大学名誉教授。京都大学文学研究科西洋史学専攻にて博士（文学）取得。専門は近現代アメリカ史。特にジェンダー、人種の問題に取り組む研究を多く発表しており、2024 年には単著『戦場に忘れられた人々：人種とジェンダーの大戦史』を京都大学学術出版会から出版している。

第77回
全日本合唱コンクール全国大会
文部科学大臣賞受賞

都留文科大学合唱団が、11月23日（土）に愛媛県県民文化会館にて開催された「第77回全日本合唱コンクール全国大会」において金賞、ならびに最高位にあたる文部科学大臣賞を受賞いたしました。おめでとうございます！

合唱団指揮者 清水雅彦特任教授のコメント

この度の栄えある受賞に際し、お導きくださいました全ての皆様に心より感謝申し上げます。

都留文科大学に着任して四半世紀、そのうち20余年を合唱団の顧問・指揮者として、魅力的な学生たちとともに音楽を創造できたこと、そして音楽界・合唱界に於いては「都留文」と認識され、「文大サウンド」と高い評価をいただき続けたことは大きな喜びです。合唱団は来年度から私の後任がお導きくださいます。新体制となっても「歌うことは祈ること」の思いを大切に、合唱することでさらに多くの方を包み、共有を誘うような心ある歌を、これからも歌い繋いでいってくれると確信しています。どうぞ今後とも都留文科大学合唱団をご支援くださいますようお願いします。

都留文科大学合唱団顧問・指揮者　特任教授
清水　雅彦

合唱団団長のコメント

今年度、合唱団は「One-time stage　～一度きりのステージ～仲間と歌えるこの瞬間を大切に、一度きりのステージを一人一人が楽しめるように。」を団目標に掲げ、活動してきました。全国大会のステージは、仲間と歌える喜びに満ちた、本当に素敵なひとときでした。全国大会という最高の舞台にこのメンバーで立てたこと、心から誇りに思います。

今回の受賞にあたり、これまでご指導いただきました清水雅彦先生、日頃からあたたかな応援をくださったOBOGの皆様、地域の皆様、そして合唱団に関わってくださった皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。

来年度も、皆様により一層素敵な演奏をお届けできるよう日々精進してまいります。

都留文科大学合唱団　団長　伊藤　結子

音楽系　卒業演奏会

音楽専攻主催の卒業演奏会は令和７年１月25日に開催されました。今年の４年生は８人という例年より少ない人数でしたが、一人ひとり選曲から想いを込めて本番に向けて練習し、大きなステージに不安を抱えながらも多くの方に支えられ、素晴らしい演奏会をつくることができました。４年間ご指導くださった先生方をはじめ、音楽系の先輩方、後輩の皆さん、全体合唱に参加してくださった皆さん、ホールのスタッフ及び保護者の皆様、関わっていただいた全ての方に深く感謝申し上げます。

また、音楽系での学びは、演奏技術だけではなく人としても大きく成長させてくれました。練習を通して地道な努力と忍耐力、春と秋のコンサートや卒業演奏会の運営を通して人との関わり方や仲間の大切さを、密に感じ学ぶことができました。これら４年間の学びを、これからの新たな人生に活かしていけるよう、日々精進していきます。

学校教育学科　音楽系　清水　萌

４年生と審査してくださった先生方

卒業制作展を終えて

私たち図工･美術専攻の４年生は、ゼミに所属してからの３年間、それぞれのペースを保ちながらも、作品の制作活動に励んできました。特に最後の１年間は卒業制作展に向けて一層力を注ぎ、大学生活や授業の中で培った知識や技術を活かしながら、それぞれが自分らしい作品を制作することができたのではないかと思います。

私自身、４年生に進級してからは、夏の教員採用試験対策に励みながら、卒業論文や卒業制作に取り組む、忙しくも充実した日々を送っていました。勉強や面接の練習の合間に、仲間と話しながら共に作品を制作する時間は、私にとってかけがえのないものでした。

私の作品テーマは「魔法」です。仲間と過ごした楽しい時間と魔法のある心躍る世界を組み合わせた表現ができたと思います。

今年度の卒業制作展『活性化』（会期：令和７年１月31日～２月５日）には、本学関係者をはじめ、多くの方々にご来場いただき、貴重なご感想を頂きました。皆様に深く感謝申し上げます。そして、これまでご協力くださった多くの方々、図工･美術専攻の仲間へ、本当にありがとうございました。

図工･美術専攻４年　奈良桃伽

令和6年度

「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞しました

地域交流研究センター地域インクルーシブ教育分野（クロスボーダープロジェクト・キャリアデザインワーク）が、令和6年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰の功労者表彰を受賞しました。文部科学省による表彰式は12月10日（火）に執り行われ、後日、地域交流研究センター長の地域社会学科鈴木健大教授、地域インクルーシブ教育分野の学校教育学科堤英俊教授、佐藤比呂二特任教授、山本剛特任教授より加藤敦子学長へ報告が行われました。

本表彰は、障害者の生涯を通じた多様な学習を支援・実践する活動およびその活動を行う個人または団体について、その内容がほかの模範と認められるものに対しての功労・功績をたたえる表彰となります。

地域インクルーシブ教育分野では、地域の特別なニーズのある人たちおよびそのご家族への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを念頭に置いて、今後も大学内の学生や教職員、地域の市民・団体と共同して活動することに重点を置いて取り組んでまいります。

株式会社クスリのサンロードとの包括連携協定を締結

株式会社クスリのサンロードと本学との包括連携協定締結式が令和6年10月31日（木）に行われました。

この包括連携協定は、本学および株式会社クスリのサンロードが研究、人材育成、地域への貢献に関し、組織的な連携をもとに相互に協力し、地域の発展に貢献することなどを目的としています。

締結式では、株式会社クスリのサンロード専務取締役の山下光浩様と加藤学長による調印が執り行われ、今後は防災や健康維持、研究推進といった7つの分野で連携が図られることとなります。

また、同日開催していた学園祭「桂川祭」に、管理栄養士による健康測定「カラダ測定会」を出張いただき、加藤学長をはじめ多くの職員・学生が参加しました。

都留市立谷村第一小学校公開研究会で授業指導と講演を実施

11月28日（木）、谷村第一小学校において「令和６年度谷村第一小学校公開研究会」が本学の協力のもと開催されました。当日は、公開された1～6年生の各授業に本学教員が助言を行ったほか、全体会では加藤学長による講評と、新井仁教授による講演が行われました。

講演では、新井教授が研究テーマの一つである数学教育学を例に挙げながら、一人ひとりの子供が複雑に変化する社会に主体的に対応し、その創り手となるためにどのような力が必要か、などについて語りました。

西湖カヤックエコツアー開催！

11月17日（日）に、株式会社アミューズと本学の初共同プロジェクトとなる「地域の魅力発見！西湖カヤックエコツアー」を開催しました。

本ツアーは、学生がグループワークやフィールドワーク等の授業で郡内地域の魅力や歴史を学び、自らの言葉で地域住民や観光客に伝える体験プロジェクトとして企画されたものです。

ツアーでは、学生７名がガイド役となり、HOBIE（足漕ぎカヤック）に乗りながら西湖の魅力や富士山の眺望スポットを紹介したり、地域資産や自然環境についての質問に答えたりしました。

株式会社アミューズとのプロジェクトを通じて、西湖の水上でしか味わえない特別な自然体験による新たな地域貢献が実現しました。

授業体験 Week 実施報告

昨年に引き続き、大学の授業に高校生が参加できるイベントを今年も実施いたしました。昨年、大変好評を頂いたことから今年は期間を延ばし、11月4日、5日、7日、8日の4日間を授業体験 Week として開催いたしました。講義や実技科目だけでなく、大学ならではのゼミへの参加も可能とし、最終的に 100 を超える講座の中から高校生に希望の授業を選んでいただきました。授業公開にご協力賜りました教職員や本学学生には深く感謝申し上げます。

高校生の参加総数は 54 名であり、特に祝日だった 11 月 4 日に多数のご参加をいただきました。本学のオープンキャンパスに参加したことが無いという参加者も 4 割弱いたことから、より幅広い高校生に本学の魅力や大学での深い学びをお伝えできたことと推察しております。

参加者の皆様からは「進路を考えるうえで貴重な体験となった」、「もっと違う学問分野も受講してみたい」といった意欲的なご意見を多数いただくことができました。また県内の高校生だけでなく、北海道や山口、新潟といった遠方からもご参加をいただけたことは大変嬉しく思います。今年の授業体験 Week が無事に開催できましたのも、多くの方々のご尽力によるものと深く感謝しております。誠にありがとうございました。

広報委員長　吉岡 卓

11月4日（月）　3限
三浦先生のゼミの様子

11月4日（月）　4限
邊見先生の授業の様子

11月8日（金）　2限
中川先生の授業の様子

学長による授業公開を行いました！

令和 6 年 12 月 26 日（木）および 27 日（金）に、本学学長による授業公開を開催しました。本企画は、高校 1 ～ 3 年生を対象に、実際の講義に参加することで本学での学びを体感できるイベントとして実施されたものです。1日目は 1 ～ 4 限、2 日目は 1 ～ 3 限を公開し、2 日間で 5 名の高校生が参加しました。

当日は、1 コマ 90 分間の授業に参加し、真剣な表情でメモを取ったり、グループワークで積極的に在学生と意見交換したりする参加者の姿が見られました。事後のアンケートでは「志望校選びのとても良い機会になった」や「またこういったイベントを開催してほしい」といったコメントをいただきました。

トレント大学（カナダ）と国際交流に関する覚書（MOU）を締結しました

９月に英文学科のコーラ・オラグボイエガ教授がカナダのトレント大学を訪問し、国際交流に関する覚書（MOU）を締結しました。

トレント大学と本学との関係は、コロナ禍の2021年夏に国際教育学科がオンラインによる英語研修を実施したことから始まりました。

この度の覚書（MOU）締結により令和７年２月からトレント大学での短期語学研修が実施されることになり、20名の学生が令和７年２月20日（木）～３月16日（日）までの３週間のプログラム日程で春期語学研修に参加し、英語力の向上を目指します。

トレント大学のキャシー・ブルース学長と本学コーラ・オラグボイエガ教授

国際教育学科受入留学生（T-SAP生）修了式

12月11日（水）、2024年度後期の国際教育学科交換留学生（T-SAP生）の修了証書授与式を行いました。デンマーク、スウェーデン、ベルギーの３か国からの合計13名の留学生が出席し、加藤学長より修了証書が授与されました。

留学生を代表し、UCSYD（デンマーク）とKP（デンマーク）出身の２名が、都留での思い出話や出会った人々への感謝の言葉等を語りました。

加藤学長からは「これからの世界をより良いものにしていくのは皆さんである」と、期待を込めた激励の言葉を頂戴しました。

都留や日本で出会った人々との縁や、新たに得た価値観を大切に、それぞれがこれからも世界で活躍してくれることを願っています。

春期休業期間中に盛況に開催　学内合同説明会＆バスツアー

最近の就職先の割合は、教員26%、公務員20%、民間企業54%です。こうした学生の就活ニーズを踏まえ、春期休業中の2月、3月に企業・公務員関連の合同説明会とバスツアーを開催しました。

合同説明会は、2月に企業40社による「山梨・静岡・長野　学内合同企業セミナー」、13官公庁による「公務員合同セミナー」を実施しました。また、2月のバスツアーは、東京ビッグサイトで行われた「キャリタス合同企業説明会」、甲府市内の鑑別所、地裁を視察した「公務員の仕事見学バスツアー」を開催しました。3月には「山日YBSグループ本社職場見学ツアー」を企画するなど、これらのイベントには延べ180名弱の学生が参加し、今後の就活に備えたよい機会となりました。

event

都留文科大学附属小学校 教育課程特例校（英語特区事業）

ミニミニ大学開催

11月11日（月）、都留文科大学附属小学校の児童31名が都留文科大学を訪れ、春日由香副学長による大学の説明を受け、附属図書館見学や低学年・高学年に分かれて海外からの研究生との交流およびアーロン先生の特別講義を体験しました。

アーロン先生の特別講義では先生の母国紹介やグループに分かれて英語での挨拶を行い、知っている英単語を話し合い、発表を行いました。また、海外から留学してきた研究生2名の母国紹介を聞き、自己紹介など英語による交流を行いました。

附属図書館では司書による絵本の読み聞かせを行いました。図書館内の英語の本の紹介もあり、自由時間には本棚から紹介された英語の本を手に取る児童もいました。

event

文大ボランティアひろば

都留文科大学では学生のボランティア活動の推進のため、都留市社会福祉協議会と連携して毎月「文大ボランティアひろば」を開催しています。月に1～2回、昼休みの時間を利用して、地域のボランティアニーズの紹介を行ったり、ボランティア団体からゲストをお招きして、活動内容の紹介や体験談等をお話しいただきました。手話サークルの方をお招きして手話講座も実施しました。

今年度は「体験する」ということにも重点を置き、学外に飛び出して休み時間内で活動できる範囲内でごみ拾いを行う清掃活動や、THMC前の花壇を除草する花壇整備活動も実施しました。また、社会福祉協議会協賛のもと、大学内で赤い羽根共同募金運動も実施しました。

10月24日（木）ボラひろ（つるのもり）

11月14日（木）ボラひろ（ゴミ拾い清掃活動）

event

子ども公開講座

手作り石鹸やキャンドルを作ろう

10 月 12 日（土）、「手作り石けんやキャンドルを作ろう」を開催しました。大学生の補助を受けながら、好きな形、色、匂いを選び石けんやキャンドルを作成しました。ドライフラワーや様々な形でつくられた装飾をバランスよく配置したり、色の組み合わせ等を工夫して作成していました。

手作り石鹸

VR 体験・レーザーカッターでデジタル工作

11 月 30 日（土）は「VR 体験・レーザーカッターでデジタル工作」を THMC の DIGITAL コモンズで開催しました。自分で描いた絵や文字をレーザーカッターで彫刻し、キーホルダーを作成しました。初めて見るレーザーカッターに興味を持ち、彫刻する動作を静かに眺める場面もありました。彫刻中は VR 機器の体験も行いました。

VR 体験

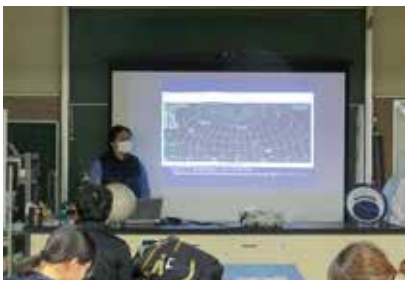
event

市民公開講座

湧水さんぽ／星空観察会

11月16日(土)に、「湧水さんぽ」を開催しました。学校教育学科の内山美恵子教授からコースの説明があり、大学を出発して田原の滝や太郎次郎の滝まで歩きで、地層と湧水の関係等の解説を聞きながら、湧水に関するポイントをめぐりました。

星空観察会が 11 月 8 日（金）、12 月 7 日（土）の 2 日間開催されました。講師の古荘玲子先生から天体望遠鏡の仕組みや観察会の時期にみられる惑星についての解説を受け、自然科学棟の屋上にある天文ドームや屋上に設置した天体望遠鏡から星空を観察しました。空が曇って星が見えない時間もありましたが、2 日間とも天体望遠鏡から月、土星、木星などを観察することができました。



event

文大名画座「帆花」

12月18日（水）に文大名画座「帆花」を2号館2101教室にて開催しました。この映画は生後から医療的ケアを要する西村帆花さんのご家族の日々を描いたドキュメンタリー映画です。医療的ケアを要する子どもの教育や支援、そして障害者の生涯学習について、多くの学生や市民に考えを深めてもらう機会となるよう企画しました。

学校教育学科堤英俊教授から映画の背景解説があり、映画の上映を行いました。映画本編の上映後には、映画撮影時から10年後の帆花さんの姿を撮影した映像の一部を上映しました。その後、出演者であり帆花さんの保護者の西村理佐さんにオンラインで出席してもらい、参加者に向けて映画撮影時から現在までの状況や映画撮影時の背景等についてお話しいただきました。

event

東京の病弱教育の主人公たち作品展

「東京の病弱教育の主人公たち作品展」を10月25日（金）～11月7日（木）THMC 2階エントランスホールにて開催いたしました。展示された作品は、東京の病弱教育を経験した子どもたちの絵や作文、詩等をポスター印刷してパネルにしたものや、手芸の作品や習字の実物も展示されました。また、院内学級で学んだ中高生が演奏した軽音楽をBGMにした作品のスライドショーも放映されました。

11月2日（土）には院内学級経験者や保護者、元教員が、子どもたちの詩や絵本の朗読による「つなぐコンサート」を2公演行いました。期間中は学校教育学科 佐藤比呂二特任教授が常駐し、学生や学外からの来場者に作品等の解説等をお話しされました。

1号館改修工事スケジュールについて

平成 21 年に「公立大学法人」へ移行し、令和 7 年度に創立 70 周年を迎える本学は、『菁莪育才』を学訓に時代の変化に迅速に対応できる幅広い教養を備えた職業人、社会人の育成を行う知の拠点として大切な役割を担っています。この歴史を受け継ぎ、全国から学生が集う独自な特性·恵まれた自然環境·開学より温かな関係を築き上げてきた地域の人々とのつながりを大学運営に有効に活かしたキャンパス整備を行います。

令和 7 年度からはキャンパス中央に位置する 1 号館の全面改修による講義棟の整備をおよそ 2 年半の期間をかけて実施いたします。現在のスケジュール想定としては 4 月頃より仮設教室の建設を始め、8 月頃の完成を予定しています。これに伴い、令和 7 年度の前期は 1 号館を通常利用しますが、後期より仮設教室やその他代替整備教室等を使用し、授業を実施していきます。

1 号館の改修工事については令和 7 年 8 月頃の着工を想定しており、工事期間中については、1 号館への立ち入りは全面禁止となります。先に述べた通りおおよそ 2 年半の工事期間が見込まれるため本格的な供用開始となるのは令和 10 年 4 月を想定しています。在学生や新入学生の皆様には 1 号館を使用できないことで、多大なご迷惑をおかけしますが、本学が大学間競争に打ち勝ち、選ばれる大学、魅力あふれる大学となるために、“ 教育の質 ” を高め、さらに本学を発展させていくためにご理解、ご協力をお願いいたします。

ユタ州プロボ、バンクーバーでの大学図書館調査で考えたこと

日向　良和

BYU 図書館

私は 2024 年 12 月に文科省「2030 デジタル・ライブラリー検討会」の海外調査の一環として、ユタ州プロボにあるブリガムヤング大学（BYU）、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学（UBC）の図書館調査をおこなった。今回の調査の主眼は現在日本の大学が 2030 年までに実現を進めている「デジタル・ライブラリー」について、海外の研究大学の実相を調査することで、主な調査テーマは学術情報のオープンアクセスへの対応、研究データ管理、場としての大学図書館の役割、人材確保を主なテーマとしている。BYU では図書館司書の定型的な仕事について AI の活用が強く期待されている点、学生の学修支援を細かくおこなっている点などの話を聞くことができた。また UBC では学生の居場所、学修支援の場としての大学図書館の役割と、大学側が提供する学修支援のためのミニセミナーやワークショップについて伺うことができた。両大学ともに学生、特に 1 年生への教育に力をいれており、大学図書館司書がリサーチ・アシスタントに近い能力と知識をもって今後サービスをおこなうことを見いだすことができた。また大学が学生の生活の中心として多くの時間を過ごすために、大学のキャンパス整備の重要性も認識することができた。

合わせて、空き時間にソルトレイクシティ公共図書館、バンクーバー公共図書館中央館も見学することができた。両図書館ともに入り口にライブラリーショップがあり、除籍本の購入やさまざまなグッズを販売して図書館の運営費に資することをしていた。都留文科大学でもグッズの開発は重要な役割をはたすため参考になった。両公共図書館ではティーンズへのサービスとしてデジタルゲームが提供されていたのが印象的だった。本調査は中央大学小山先生、本学図書館司書藤原氏と合同でおこなった。ご協力いただいた関係各位に感謝申し上げます。

ぶんだい堂

日本近現代文学史への招待

山﨑義光・尾崎名津子・仁平政人・野口哲也・村田裕和・森岡卓司 編
2024 年 10 月発行
ひつじ書房

◇野口　哲也
国文学科　教授

小学校外国語科指導法

日米の小学校教員としての経験をお話しします！

上原明子 著
2024 年 3 月発行
学術研究出版

◇上原　明子
学校教育学科 教授

国際バカロレア教育研究の最前線

実践・研究から見えてきた現状と展望

川口純・赤塚祐哉・菅井篤 編著
原和久 他　執筆
2024 年 10 月 発行
学文社

◇原　和久
国際教育学科 教授

公立大学法人
都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1
☎0554-43-4341
URL：https://www.tsuru.ac.jp/

都留文科大学報　第 157 号　2025 年 3 月 10 日発行

都留文科大学広報委員会
吉岡卓（委員長）・日向良和（副委員長）・加藤浩司・加藤めぐみ・堤英俊・菊地優美・小島恵・上野貴彦・原和久・蛭間將太（情報センター）・安富博史（企画広報担当）・大輪知穂（IR 担当）・舟久保薫（キャリア支援センター担当）・天野麻由（企画広報担当）・奥脇開斗（企画広報担当）